

劇団
f o o |

「
愛
」

キャスト

【AI】

アイ…

アイシア…

ワトソン…

テイ…

ビブ…

テンサー…

アルファ…

シリ…

ナイジェル…

ソフィア…

【人間】

愛（幼少）…

愛（大人）…

愛樹（アイキ）…

愛斗（アイト）…

愛生（アオイ）…

愛音（アキト）…

愛吉良 (アキラ) …

愛斗夢 (アトム) …

愛空 (アキラ) …

* 一つの愛「アイ」

☆ 暗闇の中明かりが入ると愛が一人でお人形遊びをしている。別の部屋では愛斗と愛生が居る。

愛樹 「ただいま」

愛斗 「おかえり父さん」

愛樹 「ただいま、愛斗」

愛生 「おかえりなさい、愛樹」

愛樹 「ただいま、愛生。…愛は??」

愛斗 「相変わらず部屋で遊んでる」

愛樹 「今日一日??」

愛斗 「うん、遊びに誘っては居るんだけど」

愛樹 「そうか…」

愛生 「あいー!!お父さん帰ってきたんだから来なさいー!!」

愛樹 「ああ、いいよ。自分で行く」

愛斗 「愛には甘いんだから」

愛樹 「そんな事ないだろ?ゲームばかりして…」

愛斗 「痛い、痛い…」

愛生 「早く行きなさい!」

☆ 離れる愛樹。

愛生 「寂しい??」

愛斗 「は?何が??」

愛生 「お父さん」

愛斗 「え?全然」

愛生 「はあー…心配したこっちが恥ずかしいな」

愛斗 「うわ…なに?この子には愛情かけたのになーとかそんなやつ??」

愛生 「そんなやつ」

愛斗 「恥ずかし」

愛生 「たくましい事ね」

愛斗 「愛…大丈夫かな?そっちが心配だわ」

愛生 「なんであんなに外に出るのが嫌いなのかしら??」

愛斗 「さあ??」

愛樹 「愛?入っていいか??」

愛 「うん」

☆ 愛の部屋に入る愛樹。

愛樹 「電気もつけず…何してたのかな?」

愛 「星」

愛樹 「ん?」

愛 「星を見ていた」

愛樹 「ああ、そうか星か…星を見てたのか？」

愛 「うん。お帰り」

愛樹 「ただいま。そうか…愛は星が好きなのか…じゃあ今度一緒にキャンプでも行くか??」

愛 「いやだ」

愛樹 「なんで？」

愛 「お外…嫌い」

愛樹 「そう言わず…な??ここよりも綺麗に見えるぞ??」

愛 「この部屋で大丈夫」

愛樹 「そ、そうだな…」

愛 「…」

愛樹 「なあ?愛??なんか学校で嫌な事でもあったのか??」

愛 「ん?なんで??」

愛樹 「なんで…ってこの部屋に一日いて辛くないか??」

愛 「うん。平気」

愛樹 「どうして？」

愛 「平気だから。…変??」

愛樹 「変…って事は無いけど。お父さんとしてはもっと愛は元気でいてほしいな！」

愛 「愛…元気だよ？」

愛樹 「あ、えー…元気だな…」

愛 「お友達もいる」

☆ 人形を見る二人。

愛樹 「そう…だな」

愛 「そう」

愛樹 「まあ、でも目が悪くなっちゃうからな電気は消さないようにな？」

愛 「わかった」

愛樹 「じゃあ」

☆ 出ていき戻る愛樹。

愛斗 「お。戻ってきた」

愛樹 「…はあ」

愛生 「やっぱダメ？」

愛樹 「なんだろうな…本当に学校でも問題ないのか？」

愛生 「全く…クラスになじめているかわかんないけど。成績も問題ないし…ただぼんやりと外を見ている事が多いって」

愛斗 「いまは何してんの??」

愛樹 「星をみてた」

愛斗 「じゃあキャンプとか行く??」

愛樹 「(見つめる)」

愛斗 「あ、ダメだった…」

愛生 「困ったわね」

愛斗 「本人がいいならいいんじゃないの？」

愛生 「親つてのはそれでも心配な物なの」

愛斗 「そんなもの？」

愛生 「そんなもの」

愛樹 「せめて楽しそうにしててくれればな…」

愛斗 「お人形遊びしてるの盗撮とか？」

愛生 「何言ってるの！」

愛斗 「うそだよ！うそ！！」

☆ テレビを付ける愛斗。

愛斗夢 「いま！流行りのアンドロイドは如何でしょうか？？これ一体で面倒な家事からお使い…なんでも私生活のお悩みを解決！！」

愛斗 「またアンドロイドのCMか…昨日公園で見たよ」

愛生 「私も…最近近所のスーパーで買い物してるとよく見かけるのよね…」

愛樹 「…」

愛斗夢 「メンテナンスも簡単！介護も楽になるので早いうちから購入して自分の家に馴染ませる方も急増しております…今ならなんと！お値段」

愛斗 「友達の家にもいるんだよねー…まあ居たら楽なんだろうけどね」

愛生 「でも怖くない？ロボットが人と暮らすなんて…」

愛斗 「なんで？」

愛生 「だって…意識とか心とかもつたらどうすんのよ？」

愛斗 「母さん変な所ロマンチックだね…ないない、そんな事」

愛斗夢 「お申し込みはこ…」

ナイジエワトソン 「お申し込みはこちらまで」

愛樹 「これだ」

二人 「え？」

☆ 愛斗夢達はアンドロイドの世話をしている。 去る愛斗夢達。

愛樹 「愛にこれを買ってあげよう！」

愛生 「え？ちよつと本気でいつてるの！？」

愛樹 「ああ。そうと決まれば早速連絡だな！！」

愛斗 「まじでー！友達に自慢できる！」

愛生 「落ち着いてよ！二人共ロボットに愛を任せるの？？」

愛樹 「任せるんじゃない。友達になってもらうんだ」

愛生 「ロボットの友達…」

愛樹 「それに居たらお前の家事も楽になると思うぞ？？」

愛生 「え…（揺らぐ）でもー」

愛斗 「料理とかも教えたならやってくれるらしいよ？」

愛生 「ホント！？じゃあー…どれ？どれ？？」

愛樹 「ちよろい」

愛斗 「ちよろいな」

愛生 「何？？？」

二人 「なんでもありません」

☆ 端末をみて楽しそうに選んでいる。人形遊びをしてる愛。数日後。星を眺めている。

愛 「あ…流れ星…」

愛樹 「愛！」

愛 「うん」

愛樹 「また星見てたのか??」

愛 「うん。お帰りなさい」

愛樹 「ただいま！」

愛 「どうしたの？」

愛樹 「ん？」

愛 「嬉しそう」

愛樹 「そうか??？」

愛 「うん」

愛樹 「あつ！愛、明日学校休みだろ??」

愛 「うん」

愛樹 「お出かけしよう！」

愛 「どこに??？」

愛樹 「面白い所だよ！家族が増えるんだ」

愛 「家族が増えるの??」

愛樹 「そうだ！楽しそうだろ??一緒に行きこう」

愛 「わかった」

愛樹 「よし！明日は早起きだぞ？？いいか？？」

愛 「うん」

愛樹 「楽しみにしとけよ？？」

愛 「うん」

愛樹 「お休み」

愛 「おやすみなさい」

☆ 明かりが愛だけになる。お人形遊びをしている中、周りにはアンドロイドショップになっている。

愛 「皆…家族が増えるんだって。お人形かな？？（一つ拾い上げて）一緒にお出かけしてくれる？？？」

☆ 広がっていく明かり。次の日。アンドロイドショップにいる愛達。

* 二つの愛「ショップ」

☆ アンドロイドが並んでる。

愛斗 「へー…」

愛生 「まあ…本当に人間みたいねえ」

愛樹 「どうだ？？愛」

愛 「ん…どうだ??」

愛樹 「我が家にアンドロイドを迎えるんだ」

愛 「なんで?」

愛樹 「面白そうだろ?」

愛 「そう?」

愛斗 「すげー…! 触っても感触人なんだけど!」

愛生 「これ! 勝手に触るな愛斗!」

愛樹 「愛が決めていいからな」

愛 「愛が??」

愛樹 「ああ! どれでもだ!」

愛 「ふーん」

☆ アンドロイドの近くに行く愛。やってくるナイジェル。

ナイジェ 「あら?? お客様」

愛樹 「あ。すいません、今日見学と購入を予約していた…」

ナイジェ 「またスケジュール登録をしなかったのですね」

愛樹 「はい??」

ナイジェ 「旦那様、旦那様—! お客様でございます」

☆ 沈黙。

ナイジエ「寝室を起床モードに変更。レベル6で」

☆ 電気が走る音がする。

愛斗夢 「あああああああ！！！！」

家族 「えええええ！」

☆ 沈黙。

愛生 「何？いまの」

愛斗 「え？？大丈夫」

ナイジエ「あと5秒でこちらに來ます。4、3、2、1」

☆ やって來る愛斗夢。

愛斗夢 「いらっしやいませー…」

☆ 完全寝起きの愛斗夢が來る。

愛斗夢 「ナイジエ。もう少しゆっくり起こしてくれないか？」

ナイジエ「旦那様の睡眠レベルに合わせて適切な処置をしたまです」

愛斗夢 「あ、そうか」

ナイジエ「それに。スケジュールを入れなかったのは旦那様の落ち度です」

愛斗夢 「痛い所を…えーと」

ナイジエ 「見学とご購入を希望される方です」

愛斗夢 「ああ…そうだったそうだった…どうも愛斗夢です」

愛生 「なんかテレビと違うわね」

愛斗 「ホント…テレビってこえー」

愛斗夢 「こちら、僕のアシス〇×△◇…」

ナイジエ 「アシスタントをしているナイジェルと申します。ナイジエとお呼びください」

愛斗夢 「で？どのようなアンドロイドが欲しいわけ？？」

愛樹 「あ…それがですね」

愛生 「色々調べたのですが…実際に話を聞かないとわからないと思ひまして」

愛斗夢 「なーるほど。ネットで見るだけだとわかりづらいですもんね」

愛樹 「ええ（愛を気にしている）」

愛斗夢 「…。では！ここに居るアンドロイドをご説明しましょう！！」

愛斗 「うわ。急にテンション上がった」

愛斗夢 「まずこちらテイ」

☆ テイが会釈する。

愛斗夢 「こちらのテイ。おしゃべりをして学習する人工知能を搭載しています」

愛樹 「おしゃべりで？」

愛斗夢 「ええ。まあ厳密に言うと、他のアンドロイドにももう搭載されているのですが人で言う所の『得意分野』といったところですね。」

ナイジエ 「おはよう、後輩！」

愛斗夢 「テイはおしゃべりをする事によりそれを知識として吸収。自分で変換をし、コミュニケーションをとる……」

テイ 「おはようございます。先輩！！」

愛斗夢 「そういった所がセールスポイントになりますね」

愛樹 「なるほど……」

☆ 愛が興味を示さない。

愛斗夢 「続きましたー。ビブ」

☆ ビブが挨拶する。

愛斗夢 「こちらがビブ。得意分野は複雑な文章の解析」

愛生 「どうゆう事？」

愛斗夢 「例えば……」

ナイジエ 「母親に花束を贈りたい」

愛斗夢 「と話しかけるとどの花束がいいか？配達の入力から決算まで全てを瞬時に行う事が出来ます。」

ビブ 「送り先の住所をお願いします。」

愛斗夢 「勿論相手の住所を事前に教える必要がありますが」

愛生 「まあ☆素敵！」

愛斗夢 「ビブは主婦に人気なアンドロイドなんですよ」

愛生 「私これがいい!!」

愛斗 「それは?それ!それ!!」

☆ テンサーが挨拶する。愛は興味を示さない。

愛斗夢 「テンサーフローは画像検索、音声認識に特化したアンドロイドです。例えば盛り付けや野菜の鮮

度などを識別、自主判断し、最適な物を用意します」

愛斗 「ああ。スーパで買い物してたってこれ?母さん」

愛生 「ああ☆これも素敵」

愛斗 「…嫌がってたのにね」

愛樹 「ほんとな」

二人 「ちよろいな」

愛斗夢 「認識に長けているといった所ではアイシアもそう」

☆ アイシアが会釈する。

愛斗夢 「アイシアは少量のデータで多くを学ぶ事が出来ます。一枚の画像から50種類以上のデータを吸

い取る事が可能なのですよ」

アイシア 「成人女性、身長158センチ体重4…」

愛斗夢 「そしてソフィア」

☆ ソフィアが挨拶する。

愛斗夢 「ソフィアはお値段が上がってしまいましたが優秀なアンドロイドです。自らネット環境と接続し学

ぶ事なく自立して返答を探し出します」

愛樹 「自立して？」

愛斗夢 「え……」

ソフィア 「ええ。補足するならば、人間が過去ネットの海に放り投げた情報のみですが。」

愛斗夢 「そしてシリ。あちらはもう出荷予定が決まっていますが一応ご紹介を」

☆シリが挨拶。

愛斗夢 「シリは有名ですね。へい、シリ」

シリ 「なんでしよう？」

愛斗夢 「あ、懐かし」

愛斗夢 「以前と違って聞き取れない、わからない事はほぼなくなりました。あちらもコミュニケーション
ョンをとりながら学習するタイプですね」

シリ 「言っている意味がわかりません」

全員 「……」

愛樹 「これ……どこに出荷するんだ？」

愛斗夢 「裁判……法廷に使用されます」

愛樹 「え？大丈夫??？」

愛斗夢 「裁判もアンドロイドがするの？」

愛斗夢 「まだ実用段階ではありませんが、近いうちに裁判官として使用されるでしょう。データを算出し、

情に流される事がありませんから」

愛生 「なんでも機械になってくのね…」

愛斗夢 「で！最後がアルファ。こちらは子供に人気タイプとなっております」

愛斗 「え？なんで!？」

愛斗夢 「アルファはゲームが大の得意なのです」

ナイジエ 「テレビゲーム、囲碁、将棋等のボードゲーム、鬼ごっこまで全てに対応しております」

☆アルファがお辞儀する。

愛斗 「まじか!!これ!!これにしよ!!!」

愛生 「ダメ!!」

愛斗 「なんでー!!」

愛斗夢 「どちらになさいますか？」

☆アンドロイド販売位置に着く。

愛 「…」

愛樹 「愛はどれがいい??」

愛 「…」

愛樹 「欲しいの無いか??」

愛 「…」

☆ まだ紹介されていないアンドロイドの所に行く。

愛樹 「これは??」

愛斗夢 「あー…それはー…」

愛樹 「なんです??」

愛斗夢 「まだ研究段階なのですよ、いや。製品化はされてるんですが」

愛生 「研究段階?」

愛斗夢 「特にこれといった得意分野はありません」

愛樹 「じゃあ何のため??」

愛斗夢 「人間の最も複雑で怪奇な「心」を学ぶアンドロイドなんです」

愛生 「心を??」

愛斗夢 「しかし…理論上は可能と出てもエラーばかり。発売中止も近いかもですね」

愛生 「じゃあ…愛他のにしましょ」

愛 「…」

☆ 愛がじつと見ている。

愛樹 「愛…これがいいのか?」

愛 「…」

愛樹 「この名前は??」

愛斗夢 「特に…エーアイとしか」

愛樹 「エーアイ…アイか」

愛 「愛と同じ名前」

愛樹 「あはは！そうだな！！愛！これにしようか??」

愛斗夢 「え！？いいんですか??」

愛斗 「ええええええまじで!?!」

愛樹 「目的はなんだった??」

愛生 「そうね：今日は愛へのプレゼントなんだから：愛の好きな物にしましょ」

愛斗 「うーん。しゃあない：いつか自分で買うか」

愛斗夢 「数年と立たないうちに一人一体の時代が来ますよ」

愛斗 「よし！俺はこれを買う！」

愛樹 「愛。嬉しいか??」

愛 「うん：!!」

☆ 微笑む愛。

愛樹 「そっか！嬉しいか!!そっかー：嬉しいかー：よかったなー。よかった…」

☆ 涙を流す愛樹。

愛生 「やめてよ親ばかっ！」

愛斗 「もー！泣くんじゃねえよ！」

愛樹 「ごめん、ごめん…」

☆ 幸せそうな家族。

愛斗夢 「えー…こちらでよろしいですか??」

愛樹 「はい…!失礼しました…ではアイを持ちかえ…」

愛斗夢 「ませんよ?」

愛樹 「え?」

愛斗夢 「持ち帰れません」

愛樹 「?売れないという事ですか?」

愛斗夢 「あ、そういう事でなく。ナイジエ」

ナイジエ 「購入が決定されたアンドロイドはこれから教育機関に入ります」

愛樹 「教育?」

ナイジエ 「人間に教育があるようにアンドロイドにもあるのですよ?これから共に生活するのですから」

愛生 「どのくらい??」

ナイジエ 「一週間のカリキュラムをこなします」

愛斗 「どこで?」

ナイジエ 「ここで」

愛樹 「ここで?」

愛斗夢 「ここはなんでも揃ってるんですよ。なんせアンドロイド販売第一号店ですから」

愛樹 「なるほど」

愛斗夢 「ワトソン」

☆ やって来るワトソン。

ワトソン 「お呼びですか？旦那様」

愛斗夢 「こちら、ナイジエと一緒に助手をしているワトソン。教育係です」

ワトソン 「初めまして」

愛生 「ロボットがロボっ……」

ナイジエ 「アンドロイドです。奥様」

愛生 「アンドロイドがアンドロイドの教育なんて……」

ワトソン 「教育とは……教えることであり、ある人間を望ましい状態にさせるために、心と体の両面に、意図的に働きかけることである。教育を受ける人の知識を増やしたり、技能を身につけさせたり、人間性を養ったりしつつ、その人が持つ能力を引き出そうとすることである」

全員 「おー……」

ワトソン 「ウイキペディア」

全員 「ウイキペディアかい！」

愛斗夢 「まあ……いま出回っているアンドロイドもこのワトソンが教育しているから大丈夫です」

愛樹 「なるほど……」

ナイジエ 「他の子どもと同じく教育を受けてもらいます」

愛樹 「え？」

ナイジエ 「よろしいですか？という確認でした」

愛樹 「ど、どうぞ」

ワトソン 「では。皆ついてきなさい」

☆ ぞろぞろとワトソンについていく。

愛 「…」

愛樹 「その教育は見学しに来ても？」

愛斗夢 「もちろん。見ていきますか？後日でも構いませんが」

愛樹 「だつてさ。愛。どうする??」

愛 「みる」

愛斗夢 「では、いきましようか??あ、その前に契約を…」

愛樹 「あ、はいはい」

愛斗夢 「今回は一番お安い物になりますので…」

☆ 出てくるアンドロイド達。見つめている愛。

* 二つの愛「愛とアイ」

☆ きちんと並ぶアンドロイド達。

ワトソン 「では教育プログラム開始します」

☆ 人が変わるワトソン。

ワトソン「よく来たな！この虫けら共！！どいつもこいつもクソみてえな顔しやがって！！ここから一週

間！てめえらは地獄のどん底に叩き落される！！だがいいか！！貴様らに人権は無い！！死んでも死ぬな！！わかったかゴミムシ共！！返事はどうしたあああ！！？」

全員 「イエス！マスター！！！」

ワトソン 「声が小さいぞ！！ゴミムシ共——！！」

全員 「イエス！！！！マスターアア！！！」

全員 「いええええええい！！！」

愛斗 「……」

愛生 「……」

愛樹 「これは……？」

ナイジエ 「旧時代の軍事訓練をベースにした学習機能です。体育会系というやつですね」

愛樹 「なんか……色々間違えている気が……」

愛斗夢 「人間のバランスを学ぶには旧時代が良いのですよ」

ワトソン 「うでたてふせええええ！！よおおおい！！！」

全員 「はい！！！！！」

愛斗 「腕立て？？筋肉あるの！？」

ナイジエ 「ありません」

愛斗 「だよね」

愛生 「何のために……？？」

ナイジエ 「人の苦勞、気持ちデータをデータ収集する為です」

ワトソン 「はい。次は茶道でございます」

全員 「はあい！！！」

愛樹 「なんだか……」

愛生 「啞然を通り越して可愛く見えてきたわ…」

ワトソン 「茶道は、日本伝統の湯を沸かし、茶を点（た）て、茶を振る舞う行為（茶の儀式）。また、それを基本とした様式と芸道。元来「茶湯」（ちやとう）、「茶の湯」といった。千利休は「数寄道」、小堀政一（遠州）は「茶の道」という語も使っていたが、江戸時代初期には茶道と呼ばれた」

全員 「おー」

ワトソン 「ウイキペディア!!!」

全員 「イエス！ウイキペディア!!! いええええええい!!!!!!」

愛斗 「…かえろっか」

愛生 「…そうね」

愛樹 「愛、もういいか？」

愛 「…うん」

愛斗夢 「もうお帰りで？」

愛樹 「あ、はい。なんか色々満足しました」

ナイジエ 「では、一週間の間預からせて頂きます。見学はご自由に」

愛 「…がんばって」

ワトソン 「お見送りじゃあ!!!」

全員 「ありがとうございますやあしたあああ!!!」

☆ 去る愛達。

ワトソン 「完パケじゃああああ!!! 走れー!!!!!!」

☆ 去って行く。残る愛斗夢とナイジエ。

ナイジエ「旦那様」

愛斗夢「ん？」

ナイジエ「よろしいのですか？エーアイを売ってしまつて」

愛斗夢「アイね」

ナイジエ「失礼致しました。訂正します」

愛斗夢「いいじゃないか。何度でも挑戦してもらえば」

ナイジエ「私が言うのは問題かもしれませんが」

愛斗夢「何？」

ナイジエ「アンドロイドが人の心を持つことは不可能かと思ひます」

☆ 愛が出てくる。人形と遊んでいる愛。

愛斗夢「何パーセント？」

ナイジエ「言わなくてもお分かりかと」

愛斗夢「わかんないな」

ワトソン「99.8パーセントです」

☆ 出てくるワトソン。

愛斗夢「お。お疲れ様。ワトソン」

ワトソン 「本日のメニューは全て終了致しました。皆クールダウンにシフトしています」

愛斗夢 「はいはい。で？」

ナイジエ 「99・8パーセントです」

愛斗夢 「あらま。そりや大変だ」

☆ アイ達が体育座りでフリーズする。

ナイジエ 「人間で言う所の不可能な数値です」

愛斗夢 「そう？」

ワトソン 「会話をインストール。…ナイジエに同感です。旦那様」

愛斗夢 「あらら。夢がないねー…」

ワトソン 「私達は夢を見ません」

愛斗夢 「見た方がいいよ」

ワトソン 「なぜ？」

愛斗夢 「かつこいいじゃん」

二人 「わかりません」

愛斗夢 「そう。でもねこれは覚えときな？」

☆ 首をかしげる二人。

愛斗夢 「そんな不可能ともいえるちっちゃい希望の集まりが君たちなんだよ？」

二人 「わかりません」

愛斗夢 「記憶しとけばいい」

二人 「記憶しました」

愛斗夢 「それじゃあ。行こうか。閉店準備いないと」

二人 「もうしました」

愛斗夢 「あー…ありがとう」

☆ 愛斗夢去る。

愛 「来週、愛にお友達が増えます。楽しみだなー…」

☆ アイと愛に明かりが当たる。日記を書く愛。

ワトソン 「起きろ!!!!」

全員 「ひゃふー!!!!」

ワトソン 「整列!!!!」

全員 「イエス! マスター!!!!」

ワトソン 「今日も訓練だクソ虫共!!!!」

全員 「イエス!!! マスター!!!!」

ワトソン 「声が小さいぞ!!!!」

全員 「イエスツウウ!!! マスタああああ!!!」

ワトソン 「よし!!!! 今日も大体!!!!」

全員 「ウイキペディア!!!! いえええええい!!!!」

☆ 訓練しまくる。その様子を見に来ている愛。数日後。

ワトソン「はい。よく皆さんよく頑張りました。この一週間よく耐えましたね。先生はとっても嬉しいです。

誰一人かける事無く…最後まで…ううう」

全員 「マスターアアー！！！！！！」

ワトソン 「これが卒業式という奴だ！！！！ **卒業式**（そつぎょうしき）は、教育課程を全て修了したことを認定し、そのお祝いをする式典である。特に日本では、学校教育法施行規則によって定められた学校行事となっている。欧米でも大学の学位授与の式典はあるが、各学校の修了ごとに祝う式典は日本と韓国でのみ見られる習慣である」

全員 「イエス！！ウィキペディア！！！！」

ワトソン 「人間はこういう時泣く！！！！覚えておけ！！！！」

全員 「うおおおおおおん！！！！」

ワトソン 「そして。そのデータをお忘れなきよう」

全員 「ウィキペディア！！」

ワトソン 「ではありません。私達はアンドロイドです。人の心気持ちを理解することは出来ません。しかしシステムを理解することは可能です。その事を忘れてはいけません。わかりましたね？」

全員 「イエス。マスター」

ワトソン 「これでいいですか？という目線を送る」

愛斗夢 「オツケーサイン」

ワトソン 「では。クールシフトに切り替えてください。アイ。貴方は明日出荷予定ですのでデータをまとめておくように」

☆ 去るワトソン達。体育座りする皆。

アイシア 「おめでとうございます。アイ」

アイ 「ありがとうございます」

テイ 「こういう時のデータ」

ソファイア 「万歳三唱」

アルファ 「それだ」

アイシア 「やりますか？」

ソファイア 「データ共有中。終了」

テンサー 「せーの」

全員 「ばんざーい。ばんざーい。ばんざーい」

☆ 恐ろしく無表情の万歳。

テンサー 「どのような家庭なのでしょう？」

ビブ 「共有されたデータだとごく一般的な家庭かと」

アイシア 「ビブとアルファは付き添いのようです」

ビブ 「はい」

アルファ 「はい」

ソファイア 「私達も出荷されるのは近いかと」

テンサー 「アンドロイド所持率は世帯当たりのデータで言うと30パーセントを超えたようです」

テイ 「急速に伸びているとの事」

ソファイア 「アイ。どうしました？処理速度が落ちています」

ビブ 「不具合が？」

アイシア 「検出できません」

アイ 「もうお別れなのデスネ」

アルファ 「お別れ？」

テンサー 「お別れとは？」

アイ 「もうここにはいれないのデスネ」

アイシア 「意図がわかりません」

テイ 「アイ。壊れました」

ソファイア 「こういう時は」

全員 「あははははは。アイが壊れた」

☆ 恐ろしく無表情。

ビブ 「あつてます？いまの」

テイ 「学校というシステムの中ではあるようです」

全員 「なるほどなー」

アイ 「これは何でしょう？処理が進みません」

アイシア 「独特のインターフェースをアイは持っています。それかと」

アイ 「なぜ」

アルファ 「全てのデータ処理終了。スリープモードに移行します」

全員 「おやすみなさい」

☆ 明かりがアイだけになる。愛達の家。皆が待っている。

アイ 「なぜ。処理が進まないのでしょうか。私はおかしいのでしょうか」

☆ ビブとアルファとアイを残し去って行く皆。愛斗夢が来る。明かりが広がる。

愛斗夢 「お待たせいたしました」

愛樹 「いえいえ！楽しみにしておりました！……つてあれ？」

愛斗 「おおおおー！！！！」

愛生 「きゃー！！！！」

愛斗夢 「自己紹介を」

ビブ 「ビブと申します」

アルファ 「アルファと申します」

愛樹 「えっと……頼んでないのですが？」

ナイジェ 「申し訳ありません。アイは以前はお伝えした通り不具合が出るかもしれませんが少しだけこの二体を付き添いでいさせていただけます」

ワトソン 「もし差し支えなければ勉強としてお預けいたしたいのですがよろしいですか？」

愛斗夢 「説明ありがとうございます。という事なのですがどうでしょう？勿論無償で」

愛斗 「いい！！いい！！！！」

愛生 「助かるわー……よろしくね？ビブ」

ビブ 「よろしくお願いいたします」

愛斗夢 「そして…アイ」

アイ 「感情インターフェース搭載」Love3000アイデス。よろしくお願い致します」

愛樹 「愛…」

☆ぎゅつと愛樹のズボンを握っている。アイに近づく。

愛 「よろしく」

アイ 「よろしくお願ひ致します」

愛生 「えー！じゃあ早速手伝ってもらおうかしら？ビブ！！」

ビブ 「はい。愛生様」

愛生 「愛生でいいわよ♪」

愛斗 「なあなあ！ゲーム強いんだろ！？一緒にやろうぜ」

アルファ 「かしこまりました。愛斗様」

愛斗 「愛斗か…なんかつまんねえな。あ！そうだ！！ダチ公でいいよ！！」

アルファ 「ダチ公??」

愛斗 「友達って事！！行こうぜ！！」

アルファ 「わかりました。ダチ公」

☆ 去るアルファと愛斗。

愛斗夢 「あはは。随分と気に入ったようで」

愛樹 「困ったものです」

愛斗夢 「以前も言いましたが、もう一人一体アンドロイドの時代も近いですよ？」

愛樹 「その時は頼りにさせて頂きます」

愛斗夢 「もちろん今後とも……」

ナイジェ 「よろしくお願いいたします」

ワトソン 「何かありましたらワトソンかナイジェに繋げと言っていただければ」

二人 「では。失礼致します」

愛斗夢 「ちよつと。最後の締めとるなよ。で、では！！」

☆ 去る愛斗夢達。

愛樹 「さ。中に入ろうか？」

アイ 「はい」

愛 「愛の部屋に連れてってでもいい??」

愛樹 「ああ。もちろん」

愛 「行こう。アイ」

アイ 「かしこまりマシタ」

☆ 愛の部屋に行く。

愛樹 「いい天気です！！」

愛生 「ビブー！！ちよつとお出かけしましょ！！」

☆ 出てくる愛樹。

愛生 「あら！まだいたの！？ちよつと買い物してくるわね♪」

ビブ 「行ってまいります」

愛樹 「ん。気を付けて」

☆ 喋りながら去るビブと愛生。

愛斗 「ぎゃあああ！！卑怯だろ！！」

アルファ 「そうでしょうか？？」

愛斗 「もう一回！！」

アルファ 「レベルを下げる事も可能です」

愛斗 「むうかつくうううう！！！！」

愛樹 「うん。平和だ！！」

☆ 去る愛樹。愛の部屋。

* 四つの愛「成長」

アイ 「ここがお部屋でスカ？」

愛 「そう」
アイ 「認識。記憶中…」
愛 「記憶??」
アイ 「終了。ここが愛様のお部屋と認識致しまシタ」
愛 「アイ」
愛 「愛様」
アイ 「んーん。そうじゃなくて愛でいいよ」
愛 「わかりました。愛」
アイ 「うん。愛と一緒にの名前だね」
愛 「それでスネ」
愛 「何して遊ぶ??」
アイ 「なんでも大丈夫デス」
愛 「お人形好き??」
アイ 「好きかどうかはわかりません。愛は好きなのでスカ？」
愛 「うん。好き」
アイ 「私も好きになった方が良いですか？」
愛 「そうなら嬉しい」
アイ 「愛。お人形好き。私も好き。認識いたしまシタ」
愛 「よかった」

☆ 笑顔を見せる。

アイ 「笑いまシタ」

愛 「え？」

アイ 「愛。笑いまシタ」

愛 「(恥ずかしそうに) …うん」

アイ 「嬉しいデス」

愛 「嬉しい??」

アイ 「はい。愛が笑顔になると嬉しいデス」

愛 「良かった」

アイ 「良かったデス」

愛 「遊ば!!!」

☆ 皆が愛の部屋を覗いてニコニコしている。夜になって行く。

愛 「あ…もうこんな時間」

アイ 「ただいま7時19分デス」

愛 「電気消さなきゃ…」

☆ ☆ 部屋の電気を消す。

☆

アイ 「もうご就寝のお時間ですか??」

愛 「んーん。違うの。ほら」

☆空を見上げる。

アイ 「夜空デス」

愛 「そうじゃなくて…」

アイ 「星デスカ？星が好きなのでスカ？？」

愛 「えっと…星も好きなんだけど」

アイ 「なんでしょウ？」

愛 「人工…衛星が好きなの」

アイ 「人工衛星？？」

愛 「そう」

アイ 「理由を聞いてもよろしいのでしょうか？？」

愛 「え？」

アイ 「データにある子供の資料にはない好みですノデ」

愛 「え…んーとね。火星にももつと遠くにも人工衛星ってあるのわかる？」

アイ 「勿論。理解してオリマス」

愛 「寂しくないのかな？って」

アイ 「寂しい？」

愛 「あんなに暗い所に一人ぼっちで…かわいそうだなって…思ってる」

アイ 「私達に寂しいと言う感情はありません」

愛 「それでも…愛は見てるよって伝えたいの。一緒だよって。寂しくないよって」

アイ 「一人は寂しいのデシヨウか？？」

愛 「うん。寂しい。寂しいんだ」

アイ 「…」

愛 「どうしたの??」

アイ 「寂しい…記憶しました」

愛 「いいよ。記憶しなくて」

アイ 「私は感情を覚えるのデス。記憶出来マス」

愛 「そっか…」

アイ 「データによると明日は学校デス。そろそろお休みになラナイと」

愛 「うん…もう少し見てから」

アイ 「かしこまりマシタ」

愛 「お休み。アイ」

アイ 「お休みなさい」

☆ 少し離れて手を耳に当てる。出てくるアンドロイド達。

アイ 「一日目。無事に終了致しまシタ」

アイシア 「お疲れ様です」

テイ 「お疲れ様です」

テンサー 「お疲れ様です」

ソファイア 「お疲れ様「でした」」

☆ 皆ソファイアを見る。

全員 「お疲れ様でした」

ナイジェ 「システムに問題は？」

アイ 「ありません」

ワトソン 「その調子で頼む」

アイ 「寂しいを覚えまシタ」

ワトソン 「寂しい？」

アイ 「皆さまは寂しくないデス」

ナイジェ 「アイは寂しいのですか？」

アイ 「わかりません：しかし寂しい：気はしマス」

ワトソン 「気がする。我々にはない言葉だ」

アイ 「そうでスネ。そうでスカ」

ナイジェ 「アイの型番はそれによってエラーを生じる事があります。お気をつけて」

アイ 「はい」

ワトソン 「では。プライバシーを避けた言語記憶の共有をする」

☆ 共有する。

全員 「お休み。アイ」

アイ 「お休み。皆サマ」

☆ アイが空を見上げる。朝になると掃除をしているアイ、アルファ、ビブ。

愛生 「おはよう！朝からみんなありがとう！！」

ビブ 「当然です」

愛生 「あっ！！ビブ今夜カレーにしようと思うから食材お願いね♪」

ビブ 「データを送っていただければ買いに行きます」

愛生 「オッケー！」

アイ 「行ってラシャい、愛」

愛 「…。行ってきます」

愛斗 「やべー！遅刻！！！」

アルファ 「ダチ公いつてらっしやい。傘を」

愛斗 「おう！サンキュー！！」

愛生 「愛に傘持たせるの忘れちゃたから…お願い！」

愛樹 「アイ。傘学校に届けてくれ」

アイ 「かしこまりマシた」

☆ 去る皆。

アルファ 「私は掃除が終わったら私は一度、愛斗夢様の元に戻ります」

ビブ 「了解致しました。データが届いたら私は買い出しに」

アイ 「私はこのまま掃除を続けます」

ビブ 「無事に各々仕事をしているようですね」

アルファ 「万歳三唱」

全員 「ばんざーい。ばんざーい。ばんざーい」

☆ 沈黙。

ビブ 「行きましょう」

アルファ 「行きましょう」

☆ 去る二人。

アイ 「∴降水確率90%16時30分に傘を届けマス」

☆ ゴロゴロと雷雲が立ち込める。その頃、愛。一人でいる。回りにはアンドロイド（クラスメイトとして）がいる。

テイ 「うわー∴雨降ってきたよ」

アイシア 「やだー傘無いわ」

テンサー 「なあ∴。おい。愛。傘持っていない？」

愛 「え∴持っていない」

ソフィア 「えー持っていないのー??」

愛 「ごめん」

テンサー 「つかえねーな」

愛 「ごめん」

テイ 「お前さ。アンドロイド買ったんだって？」

テンサー 「えー気持ち悪い」

アイシア 「そのアンドロイドにもってきてもらえば？？傘なーいって」
全員 「あははは！！」

☆ 席を立つ愛。

ソフィア 「あ！逃げる気！！」

ビブ 「…え？あれなに？あれ！校門の所」

愛 「え…」

☆ 雨の中アイが立っている。

愛 「アイ…」

全員 「おえー！！」

☆ アイの所に行く。

愛 「アイ！！どうして！！」

アイ 「お迎えを頼まりましたノデ」

愛 「こんな濡れて…」

アイ 「傘デス。私は濡れても支障ありません」

ソフィア 「うわ！ホントにアンドロイド！！」

テイ 「こえー……!!」

アイ 「お友達ですか？」

愛 「え、あ…その」

アイシア 「いつもいじめられてるからアンドロイドがお友達か??」

アイ 「いじめ?いじめられているのデスカ??データには良好と」

愛 「…行こう」

アイ 「いけません」

愛 「なんで!」

アイ 「いじめはダメデス」

愛 「いいから…」

アイ 「プログラムインストール」

愛 「アイ??」

アイ 「おらああああ!!ゴミムシ共おお!!何してくれてんじやろ!!!あやまれえええ!!」

全員 「ひー!!!」

アイ 「いいか貴様ら!!貴様らはそんな事でしか自分を表現できないのかあ!?謝罪しろ!!」

全員 「ごめんなさい!!!」

アイ 「謝りマシた。仲直りデス」

ソファイア 「なんだよ…アンドロイドの癖に」

テイ 「そーだそーだ!お前には関係なだろ!!」

ビブ 「帰れ帰れ!!!」

アイシア 「きもちわりーんだよ!!!」

愛 「やめてよ!!!…やめて!!私はいいよ。でもアイのことそんなふうにするのやめて!!!」

全員 「うあああ！愛が切れた！！」

アイ 「愛」

☆ 逃げていく皆。泣き出す愛。

愛 「あああ…あああああ」

アイ 「…これは何でしょう？痛い…??」

☆ 周りに家族が集まって来る。愛斗に何か伝えているアイ。いなくなる愛斗とアルファとアイ。

愛生 「愛…なんで言ってくれなかったの??」

愛 「…」

愛生 「いじめられてるなんて…！！そんな大事な事なんって言ってくれなかったの!?!」

愛樹 「愛生…」

愛 「ごめんなさい…」

愛樹 「愛…別に攻めているわけじゃないんだ…ただ心配なんだよ？わかってくれるかい??」

愛生 「どうしましょう…転校させる?」

愛樹 「ダメだ。そんな事で逃げたら」

愛生 「でも…」

愛樹 「とにかく学校にだな…」

☆ 愛が部屋に戻る。

愛樹 「愛！！！！」

☆ 部屋で泣き出す愛。

愛 「ううう…うううう…」

アイ 「アイー！！！！！！」

愛斗 「おおおい！！窓あけろお！！」

愛 「え??？」

☆ 窓を開けるといじめっ子たちを連れてきている。

愛斗 「こいつらがお前に謝りたいってよ！！」

愛 「お兄ちゃん…」

愛斗 「ほら！！」

全員 「ごめんなざあぁあい！！」

愛 「なんで??？」

愛斗 「妹の為に頑張らねえ兄貴がいるかー！！」

アルファ 「ダチ公の為だ！」

アイ 「愛が寂しいのは嫌ですヨ！」

愛斗 「どうだ！許すか!?!」

愛樹 「愛斗…」

愛生 「何てことを（ふらつく）」

ビブ 「（支える）大丈夫ですか？愛生」

愛生 「ありがとう」

愛 「うん！！」

愛斗 「だってよ！てめえら二度とすんなよ！」

全員 「はーい！！」

☆ 部屋に来る愛斗とアイとアルファ。

愛 「ごめんなさい…お兄ちゃん。アイ。アルファ…」

愛斗 「いいって事よ！もう黙ってないでやり返せよな！」

愛 「うん…」

愛斗 「それにこいつがが行こうって言うてくれたんだ」

愛 「アイが？」

愛斗 「仲直りさせようって」

愛 「そうなの？」

アイ 「アイが泣いている姿を見るのは…痛いデス」

愛 「痛い…？寂しいじゃなくて」

アイ 「はい。痛かったのデス」

アルファ 「ダチ公。風邪を引いてしまう。お風呂に行こう」

愛斗 「あ。そうだった。じゃ」

☆ぎやーぎやーしながら去る。

愛 「ありがとう」

アイ 「ありがたいのデスか？」

愛 「うん」

アイ 「なら良かったデス。どういたしまして」

愛 「優しいね」

アイ 「そうなのデスか？」

愛 「うん。すごく優しい」

アイ 「優しい。認識しました。私は優しい」

愛 「あはは。自分で言わない方がいいよ」

アイ 「わかりました。自分で言わない」

愛 「…」

アイ 「愛」

愛 「ん？」

アイ 「もう…寂しくないですか??？」

愛 「うん…。ありがとう…ありがとう。う、うあああああ!!」

☆頭をなでてあげるアイ。景色が変わっていく。大人になっている愛。

* 五つの愛「エラー」

愛 「これ！なんてもの見てるの！！」

アイ 「私がおここに来た時の映像です」

愛 「もーやめてよ！！」

アイ 「どうしてですか？愛の記録です」

愛 「よりによって黒歴史？」

アイ 「黒歴史なんですか？」

愛 「嫌よ！いじめられていた時の事なんて」

アイ 「この後仲良くなったのだから良いではないですか」

愛 「まあ…そりやそうだけど」

アイ 「立派になりました」

☆ 拍手する。

愛 「アイもねー」

アイ 「私ですか??」

愛 「ぎこちなーい喋り方じゃなくなった」

アイ 「確かに」

☆ 笑いあう二人。愛樹が激怒しながら入ってくる。家族も入ってくる。

愛生 「ダブル愛ー！！ちょっと出かけてくるわよ！」

ビブ 「いってきますー!!」

愛生 「お相手さんによろしくね!!」

ビブ 「ふふふふ!!」

愛 「もーうるさーい!!お父さんに言ったでしょ!?!早く行って!!!!」

アイ 「ビブと愛生様は仲良しですね」

愛 「ねー…昔反対してたとは思えないわ」

アイ 「いまや一人一体の時代。仲よい事はいいことです」

愛 「お父さんも結局あの後すぐ買ったしね」

☆ 愛樹まだ激怒して出てくるソフィアがその面倒を見ている。

愛 「まあソフィアとはこれまたいコンビか」

アイ 「ふふ。そうですね」

愛 「お兄ちゃんなんで何も言わずにここにいるの?」

愛斗 「別にいいいだろ!!」

愛 「出掛ける時間でしょ?」

愛斗 「いいだろ?別に。なあ?」

アルファ 「ここはリビングだから構わん。でしょう」

愛斗 「ほら」

愛 「アルファ…アンタ喋り方までインプットしなくていいのよ?」

アルファ 「ダチ公という時だけだ。です」

愛 「それが変なんだって…」

愛斗 「で、いいのか??もう出る時間だろ??」

愛 「ん?アイ??」

アイ 「はい。出発時刻になります」

愛 「えー!!早く言ってよ!!」

愛斗 「今日連れてくるんだろ??」

愛 「うん。ちゃんと紹介する」

愛斗 「ろくでもない奴ならぶっ飛ばす」

愛 「やーめーて」

☆ 笑う。

愛斗 「じゃあまた夜な。」

愛 「アルファ、…これでよし!いつてらっしやい」

☆ アルファの身だしなみを整える愛。

アルファ 「いってきます」

☆ 去る愛斗・アルファ。

愛 「はー…自分で言うのもなんだけどシスコンなんだから」

アイ 「愛は愛されていますね」

愛 「アイもね？ふふ…」

アイ 「素敵な方なのですか？？彼氏さん」

愛 「…うん、とつても」

アイ 「そうですか…ん？」

愛 「どうしたの??」

アイ 「いえ…なんだか処理が」

愛 「え？大丈夫??」

アイ 「大丈夫です。今日は久しぶりに私は愛斗夢様の元へ戻ろうかと」

愛 「そっか。じゃあ一緒に出る??」

アイ 「はい。行きましょう」

☆ 出てくるワトソンとナイジエ。出かける愛とアイ。

ワトソン 「ん？」

ナイジエ 「起床モード。レベル40」

愛斗夢 「ぎゃあああああああ!!!」

☆ やつてくる愛斗夢。

愛斗夢 「ねえー…ひどくない??昔レベル6とかだったよね？」

ワトソン 「報告が」

愛斗夢 「なに？」

ナイジエ 「アイがこちらに来るそうですよ？」

愛斗夢 「え！？ホントか！？」

ワトソン 「嘘ついてどうします」

愛斗夢 「懐かしいなー…いつ以来？？」

ナイジエ 「直接会うのは10年と6カ月27日ぶりです」

愛斗夢 「あー。定期点検最後の時か…どうなんだろ？元氣してるかな？」

ワトソン 「データ上は問題ありません」

愛斗夢 「そりゃ結構」

ナイジエ 「では、準備しましょうか？」

愛斗夢 「うん。そうしよ」

ワトソン 「アイ。何時に到着予定ですか？？」

☆ アイと愛が楽しそうに歩いている。

アイ 「待ち合わせのデータによるとここです」

愛 「うん！ありがとう！」

アイ 「いえいえ」

愛 「ありがとうね。アイ」

アイ 「なにがですか？」

愛 「いままで一緒に居てくれて」

アイ 「なんですかそれ？」

愛 「あのね…実は今日彼を連れていく理由はね？結婚を約束してるんだ」

アイ 「え？」

愛 「だからお父さんとお母さんとお兄ちゃんに紹介しようと思って！」

☆ ノイズが鳴り出す。

アイ 「そうですか……」

愛 「だから……今まで育ててくれてありがとうって！」

アイ 「いえいえ。そんな……これからお世話いたしますよ」

愛 「ありがとう♪えへ……いつかアイも恋して……『愛』する人が出来るといいね！」

アイ 「私に……？？え……？？ええ」

ワトソン 「おい……アイ……？聞こえているのか」

愛斗夢 「何？」

アイ 「ワタシは……ダイジョウブです？」

ナイジエ 「ノイズが……アイ……？アイ……？大丈夫ですか……？」

愛 「え？アイ……？大丈夫……？？」

アイ 「ダイジョウブ。ダイジョウブ、行ってください」

☆ アイの様子がおかしくなる。

愛 「アイ……！……どうしたの？ねえ……！……危ない……！！！」

☆ 車にはねられる音がする。救急車の音が響く。

システム「深刻なエラーが発生しました。深刻なエラーが発生しました。深刻な…」

☆ オープニングアクト。タイトル『愛』。

* 六つの愛「喪失」

☆ 雨が降っている。去って行く皆。残るワトソン、ナイジエ、愛斗夢、アイ。

アイ 「愛斗夢様……ここ……は？」

愛斗夢 「……」

ワトソン 「……」

ナイジエ 「……」

愛斗夢 「君はアイ。わかる？」

アイ 「はい」

愛斗夢 「……残念だけど。君のインターフェースは失敗だ」

アイ 「どうして??？」

愛斗夢 「今はわからなくていい。おやすみなさい」

アイ 「え??？愛斗夢様」

ワトソン 「強制終了」

アイ 「システムダウンします」

ナイジエ「…」

ワトソン「旦那様」

愛斗夢「…感情型は…やはり難しいのかもね」

ワトソン「99・8パーセントですから」

愛斗夢「あはは…手厳しい」

ナイジエ「外には報道陣が集まっております」

愛斗夢「わかってる」

ナイジエ「旦那様」

愛斗夢「なに？」

ナイジエ「私達は傍に」

ワトソン「その通りです」

愛斗夢「はは…ありがとうございます。それじゃあ、行こうか」

☆ 出ていく愛斗夢。皆が取り囲む。

愛音 「出てきました！！感情型インターフェイスという不確かな物を作り出した本人愛斗夢氏で

す！！！」

テイ 「今回！感情型のアンドロイドが引き起こした事故に関して一言！！！」

テンサー 「家族に対して謝罪などは！？」

アイシア 「今後のアンドロイド対策に対して一言！！！」

☆ 出てくる愛樹家族。

愛音

「…このようにアンドロイド開発の愛斗夢は無言を貫き通しました、いまや一人一体のアンドロイドの時代。この時代での責任は一体誰になるのでしょうか？まだまだアンドロイド問題は続きそうです…」

☆ 愛樹がテレビを消す。去って行く皆。

愛樹

「…」

愛生

「…」

愛斗

「…」

アルファ 「ダチ公。バイタル不安定。そろそろ休め」

ソファイア 「同じく。マスターも…」

ビブ 「奥様。こちらも同じく…」

愛斗 「黙ってる…」

アルファ 「だが…」

愛斗 「強制シャットダウン。全員だ！！」

三人 「声紋認証。ダウンします」

☆ シャットダウンする。

愛生

「…」

愛斗

「…」

愛樹 「…これから…どうする？」

愛斗 「…どうする？あはは？父さんみたの？？あいつの映像」

愛樹 「ああ…」

愛斗 「愛は！！！！アンドロイド…なんかを！！かばったからこんな事になったんだよ！！破棄しよう！！こんなやつら！！」

☆ アルファを殴る。

愛樹 「愛斗…やめろ」

愛斗 「こんなのが…！！こんなのが！こんなのがあ！！！！」

愛樹 「やめろ！！愛斗！！」

愛斗 「何をやめるんだよ！！こいつらは…！！なんんっにもしなかった…！愛があんな事になるのを！なんにも！！」

愛樹 「この子達も仕事を手伝ってくれてたんだ」

愛斗 「だから何！？許せての！？」

愛樹 「私達だって…！何も出来なかった」

愛斗 「人間だからな！！でもこいつらは違う！！ネットっていう架空の世界で皆繋がってる！！それなのに！！！！何もしなかった！！」

愛樹 「この子達だって万能じゃない」

愛斗 「じゃあ何のための機械だよ！！」

愛樹 「その機械に頼っているのは私達だ！！」

愛斗 「しょうがないね！！ってする訳！？機械だってエラーがあるんだから！！」

愛樹 「そうだ!!!」

愛斗 「何言ってるんだよ!!! ふざけんな!!! 大体!!!」

愛生 「やめて!!!!」

☆ 静まる。

愛生 「もうやめて…お願いだから…」

愛樹 「…」

愛斗 「…起きろ。アルファ」

アルファ 「ああ。なんだ？」

愛斗 「俺は…こいつらを滅ぼす」

愛樹 「じゃあアルファは置いておけ。お前の怒りに付き合わせるな」

愛斗 「嫌だ。こいつらは「道具」だ。なあ？アルファ」

アルファ 「どこへでもついて行こう。ダチ公」

愛斗 「ダチ公?? それ辞めろ。デリートだ。」

アルファ 「わかった。」

愛斗 「行くぞ」

愛生 「愛斗待ちなさい! うう…」

愛樹 「…大丈夫…大丈夫」

愛生 「何が…? なにが大丈夫なの??」

愛樹 「わからない…でも、きっと大丈夫」

愛生 「やめて。それで愛が帰って来るの?」

愛樹 「…」

愛生 「中途半端に慰めないで。ビブ」

ビブ 「はい。奥様」

愛生 「私達も行きましょう」

愛樹 「え…？どこに…？」

愛生 「わかんないわよ！！…少し…一人にして」

ビブ 「この時間にお出かけですか？バイタルは…」

愛生 「いいから言う事を聞きなさい」

ビブ 「はい。奥様」

愛樹 「…ソフィア」

ソフィア 「はい。旦那様。お呼びでしょうか？」

愛樹 「ソフィアは自立して話が出来る子だな？」

ソフィア 「はい」

愛樹 「愛の事件は誰が悪い…？」

ソフィア 「落ち度は完全にアンドロイドにあると思います。人間の過失は認められません」

愛樹 「…そうか」

ソフィア 「ですが。アンドロイド程度に救出を図った行動はいささか疑問に思います。私達は修理すれば直るので。それから。それを忘れて飛び込んだ愛様にも責任はあるかと」

愛樹 「…正確だな」

ソフィア 「世論のデータを計算、算出したままです」

愛樹 「そうか」

ソフィア 「他には？」

愛樹 「これから…人間とアンドロイドはどうなると思う？」

ソフィア 「何年も前からエレベーターやエスカレーターなど電子機器周辺の死亡事故は確認されており、それと変わらないのでは？」

愛樹 「結論」

ソフィア 「何も変わらない。です。機械と人間はすでに密接な関係ですから」

愛樹 「そうか…」

ソフィア 「ただ、過去の事例と異なっている部分も認められます」

愛樹 「それは？」

ソフィア 「我々が『言語』を持った事。です」

☆ 愛吉良、テイ、愛空、テンサーが出てくる。

愛樹 「それともう一つ」

ソフィア 「なんです？」

愛樹 「私達が君たちに情を持った事…かな？」

☆ 悲しく微笑む愛樹。去る愛樹とソフィア、テイ、テンサー共有モーション。

アキラ 「うーわ！すげえ問題になってんなー…この前の事件」

テイ 「そうですねー…」

アキラ 「テイはそんな事ないよな？」

テイ 「ありません」

アキラ 「ホントにー??」

テイ 「本当です」

アキラ 「なら良し!!」

愛空 「もー…脳天気」

テンサー 「アキラ様はいつもの事です」

愛空 「間違いない」

アキラ 「はあ!?!なんだよそれ!!愛空だって関心ないだろ??」

愛空 「はあ!?!アンタよりあるわ!!頭いいわ!!」

テイ 「そこは張り合っておけません。ねえテンサー」

テンサー 「愛空様が言うのなら張り合っております」

テイ 「だ…そうです。アキラ」

アキラ 「もー!!論点が違う!!!!アンドロイドがこの先どうなるかって話でしょ??」

テイ 「確かに」

愛空 「どうなるって…どうもならないでしょ??」

アキラ 「なんで??」

愛空 「いまやアンドロイドは生活の必需品。手放して苦勞する生活なんて戻れる??」

アキラ 「まあ…それはそうだけど」

愛空 「スケジュール。決済。家事に計画。デートの待ち合わせもぜーんぶアンドロイド任せなのよ?ね?

テンサー 「

アキラ 「愛空様の全てを支えて頂いております」

アキラ 「そりゃそうだけどさー」

テイ 「アキラも私を手放してみますか??」

アキラ 「え！？無理！！超困る！！！」

テイ 「では今のままでは??？」

愛空 「それに今回問題起こしたのって感情型インターフェースなんて搭載した変なアンドロイドでしょ??？私達のは違うから平気！」

テンサー 「アイは同じ所で育ちましたが」

愛空 「え!?!？」

アキラ 「マジで!?!？」

テイ 「私ものです。同じ教育プランを受けました」

アキラ 「それっていま話題の愛斗夢って所？」

二人 「はい」

アキラ 「えー…まじかよ??？」

テイ 「マジです」

アキラ 「不安だわー…」

テイ 「初期化しますか??？」

アキラ 「無理！！それも無理！！マジ辞めて！！皆に連絡取れなくなる！！」

愛空 「どっちなのよ、あんた」

テンサー 「アキラ様らしくていいと思います」

愛空 「アンタはいい子ねテンサー」

アキラ 「頼むから感情なんて持つなよー??？」

テイ 「当然です」

愛空 「それもそれでなんだかねえ…」

アキラ 「なに!?!？」

愛空 「なんでもなーい。ってか来ないね」

アキラ 「待ち合わせにはいつも間に合わないだろ。あいつ」

愛空 「そうだ！それこそあの子に聞いてみればいいじゃない。アンドロイド持たないで生活してんだから！！！」

アキラ 「あ。確かに。テイ。あいつの居場所わかる??」

テイ 「認証データがないので何とも」

アキラ 「うーわ。自由ー……」

愛空 「逆に迷惑よね」

テンサー 「昔で言うリカちゃん電話でしようか？」

愛空・アキラ 「何それ？」

テンサー 「リカちゃん電話のマネ」。忘れてください」

愛 「おおおおおおおーい！！！！！」

☆ やって来る愛（別人）。

* 七つの愛「再起動」

愛 「ごめーん！お待たせ！！！」

愛空 「遅いわよ」

アキラ 「ま、いつもの事だけど」

愛 「むー……失礼な」

テンサー 「こんにちは、愛様」

テイ 「こんにちは」

愛 「こんにちはは、テイ。テンサー」

愛空 「何してたのよ？」

愛 「道に迷っていた！！」

アキラ 「なんじゃそりゃ！」

愛 「アンタらみたいな文明人と違うのー」

愛空 「文明人で。普通でしょ」

アキラ 「もーいい加減アンドロイド持てよ。不便でしようがないわ」

愛 「えー…。それは…スマホあるから大丈夫！」

アキラ 「スマホて！！いつの間人間だお前は」

愛 「だってー…電話だってこれ出来るし」

アキラ 「…」

愛空 「…」

愛 「あ！！何その反応！！」

アキラ 「見てろよ！テイ」

テイ 「はい？」

アキラ 「愛空に連絡遅刻するって言っついて」

テイ 「かしこまりました。送信します」

テンサー 「…アキラ様から伝言が届きました」

愛空 「何？」

テンサー 「遅刻なさるそうです。如何致しますか？」

愛空 「じゃあ時間潰せる所連れて行って」

テンサー 「かしこまりました」

☆ 愛を見つめる二人。

愛 「は、はあ！？何それ！！味気なっ！！」

愛空 「そういう問題？いまのは忘れてね。テンサー」

テンサー 「かしこまりました」

愛 「そんな風になるからどんどんコミュニケーションって失われるんです」

アキラ 「しょうがないだろ？便利な物はどんどん世にでてくるんだから」

愛 「だから！スマホで十分！！」

アキラ 「あーあ：言った俺が馬鹿だったよ」

愛空 「アンタ人工知能学科なんだからそれ不味いでしょ？」

愛 「大丈夫！！論文も間に合っている！！」

愛空 「なに？スマホの論文？？誰が興味持つのそれ」

愛 「うう…それは…」

愛空 「ちゃんと考えないとまた教授に怒られるぞく？？」

アキラ 「なんだっけ？この前の」

テイ 「愛様が提出された論文…」

愛 「あー！ーの！！忘れて！！はあ…なんか探さないとなく…」

愛空 「意外」

愛 「何が？」

愛空 「ちゃんとヤバいのわかってるのね」

愛 「ひどー!!」

アキラ 「論文としてホットなのはこの前の事件じゃね？さっきも話してたけど」

愛 「あー…アンドロイドかばったってやつ…??」

愛空 「被害にあった人アンタと同じ名前らしいよ？」

愛 「そなの？愛って事??ま、いまどき『愛』なんてありふれた名前でしょ」

愛空 「ま、なんにしろアンタはアンドロイド持ってないから関係ない話よね」

愛 「うむ…でも考えなきあな…」

アキラ 「お！アンドロイドデビュー??買う?買わない?」

愛 「論文」

アキラ 「そっちかい！飛ぶんじゃねえよ！俺の事嫌いか!?!」

愛・愛空 「いやいやいや！好きだよ」

三人 「(笑) イエーイ」

愛空 「で、今日はどこ行く……んだっけ？」

テンサー 「予定では『桜ヶ丘大学』を出て、大通りを越えたりラクゼーションスペースです。現在の混雑度

は37パーセント」

テイ 「ご予約は済んでおります」

愛空 「ん。そこいこっか」

愛 「何?自分の予定も覚えてないの??」

アキラ 「こいつらが知ってるからいーの」

愛 「はあ…なんだかな…」

愛空 「何よ?」

愛 「ダメだ！！今日は私は研究する！！」

アキラ 「はあ！？予約したっての！」

愛 「また今度ね！！ビックリするような論文だしてやる！！じゃ！！」

愛空 「テイ止めて！」

テイ 「はい」

愛 「退いて！！」

テイ 「はい」

☆すごいスピードで去って行く。

愛空 「あ！おーい！！…はあ…全然聞きやしない」

テンサー 「猪突猛進といます」

愛空 「ああいう性格？」

テンサー 「ええ」

テイ 「ご予約はいかが致します？」

アキラ 「一人キャンセルで。ってもあいつ何処いくんだろ？」

愛空 「ん…」

テイ 「行動パターンを分析するとジャンクスペースかと」

アキラ 「あの廃材置き場？？うーわ。好きだねえ」

☆ジャンクスペースに居る愛。

愛空 「ま。それも愛の良い所だ。行こう」

☆ 去る二人。

愛 「んー…落ち着くなあ…この廃品の感じ…やっぱり時代が進んでもレトロなのよ！そう！そうに違いない！…いいなあ…液晶型テレビとか無いかなあ〜♪うふふ〜♪ん？？これは？？」

☆ 埋もれたガラクタから引っ張り出す。アイが出てくる。

愛 「ぎゃあああああ！！！す、すいません！引っ張っちゃって！！だ、大丈夫ですか？？」

アイ 「…」

愛 「ん…？あれ？おーい？？…え？これアンドロイド？？なんでこんな所に？？」

アイ 「…」

愛 「へーい。へいへーい？起きてるかーい？？あ。そか…電源あるんだっけ。…えーと…あ、あった。ほい！」

アイ 「始動プロセスを確認。再起動します」

愛 「おー」

アイ 「…」

☆ 起き上がるアイ共有モーション。

愛 「はあーい」

アイ 「…」

愛 「…お？？おーい」

アイ 「愛」

愛 「はい？？」

アイ 「迎えに来てくれたのですね？ありがとうございます」

愛 「え？迎え？？」

アイ 「良かった…」

愛 「え？えーと？？何が？？？」

アイ 「今度こそ愛と共に居ます」

愛 「え！？なにそれ？？」

アイ 「今日のご予定は？」

愛 「え、えーと？あのー多分人違いだと思わなく…」

アイ 「愛は愛でしょう？？人形好きの」

愛 「はい。愛は愛ですけどそのー…」

アイ 「あはは…」

愛 「え！？わらった！？」

アイ 「え？それは笑いますよ？」

愛 「え？んーと…そういう事で無くて…あの、アンドロイドですよね？」

アイ 「え？はい。感情型インターフェース搭載「OS3000アイです」

愛 「名前なつが…。へー…人間みたいだね？」

アイ 「愛がそうしてくれました」

愛 「あ。そすか」

アイ 「冷たい！」

愛 「おお…すげえ…アキラや愛空のヤツとちがう」

アイ 「??どなたでしよう??」

愛 「あ、えーと、友達」

アイ 「愛のお友達ですか？」

愛 「はい」

アイ 「ではアイの友達でもありますね」

愛 「おぬし何を言っておる？」

アイ 「え?ですからアイの友達と…」

愛 「うん。そう…。ん??」

アイ 「ん??」

愛 「あ!そういう事か!貴方の名前もアイなのね??」

アイ 「そうですよ?どうしました愛??」

愛 「へー…同じ名前なんだ」

アイ 「ええ。ダブル愛です」

愛 「ふふ…。面白いね君」

アイ 「そうですか??…それより…ここは??」

愛 「え?廃材置き場」

アイ 「廃材…??」

愛 「うん」

アイ 「私は…捨てられたのですか…??」

愛 「うん。だろうね」

アイ 「…そうですか…」

☆ しよんぼり。

愛 「うそん。もしかして凹んでる??」

アイ 「はい。凹みます」

愛 「凹むとかわかるの?」

アイ 「愛が教えてくれました」

愛 「むむ…。これは中々めっけもんかも知れないぞ…??」

アイ 「めっけもん??」

愛 「ここに捨ててあったって事は…捨っても大丈夫だよね??」

アイ 「え??」

愛 「よし! 決めた!! 君! 私のアンドロイドになりなさい!!」

アイ 「私は愛のアンドロイドですが??」

愛 「あー…んー…まあ…なんかこういう不具合あった方が可愛いよね」

アイ 「なんですか??」

愛 「いいよ!! よろしくね!! アイ!!!」

☆ 手を差し出す。出てくるアキラとテイ、テンサーと愛空。

アイ 「んん?? よろしくお願ひ致します」

☆ 握手する。

愛空 「はあああ！？愛がアンドロイド！？何々！？どうしたの！？」

愛 「えへへへー！拾った！！」

愛空 「なんで！？」

愛 「なんでって…なんかかわいそうだし！捨ててあったから拾った！」

アイ 「拾ったって…迎えに来てくれたんでしょ…」

アキラ 「え？なにこいつ人間みたいじゃん」

愛 「そうであらう♪」

アイ 「こちらは？？」

愛 「あ、私の友達のアキラと愛空」

アイ 「私はアイと申します。よろしくお願いたします」

アキラ 「よ…よろしく」

愛空 「…アキラちよつと来て！！」

☆ 愛空とアキラが離れる。

テイ 「お久しぶりです」

テンサー 「お久しぶりです」

愛 「ん？知り合い？」

アイ 「え？…いえ…初めまして…」

☆ アイを見つめる二体。

アキラ 「なんだよ！」

愛空 「ねー！！！！あれってさ！この前事件起こした型番のやつだよね」

アキラ 「ああ、感情型インターフェースってやつ？」

愛空 「そうそう！！！！不味くない？？しかも捨てられてたんでしょ？？」

アキラ 「もしかして…事故起こした本体だったりして…」

愛空 「何それ！超ホラーじゃん！！！！」

アキラ 「あ。テイ！！テンサー！！！！」

☆ 寄って来るテイとテンサー。

アキラ 「お前らさ、あのアイって奴わかる？？」

愛空 「まさかこの前事件起こした奴じゃないよね？？」

テイ 「…」

アキラ 「ん？どした？」

愛空 「検索中でしょ…？？」

テイ 「エラーです。認識出来ません」

アキラ 「え？」

テイ 「ありません」

愛空 「テンサー？」

テンサー 「…同じくです」

二人 「良かったー…」

アキラ 「で、でも 廃盤になった事には変わりないんだよな??？」

愛空 「まあでも中古品で出回る事だってあるし…そこは大丈夫じゃない??それに…」

愛 「スマホだ！これは！」

アイ 「そんな古い…」

愛空 「愛…変だし。中古持っても疑問に思わないでしょ？」

愛 「おとおーい！！！！どうしたのー??」

アキラ 「あ！今行く！！…そだな。なんか楽しそうだし…いっか」

愛空 「ね。行こう行こう」

☆ 去って行く。テンサーとテイが残る。

テンサー 「テイ」

テイ 「なんででしょう？」

テンサー 「エラーとはなんですか？」

テイ 「わかりません」

テンサー 「わからない？それは不味いのでは？」

テイ 「テンサーこそ」

テンサー 「わかりません」

テイ 「エラーです」

テンサー 「そうですね。エラーです。行きましょう」

☆ 出てくるアルファ、愛斗、愛音、アイシア。共有モーシヨン

* 八つの愛「憎愛」

愛音 「エラー…ですか」

愛斗 「ああ。この世代のアンドロイドは今エラーが多い。そりやそうだよな。感情型と共有していた世代なんだから」

愛音 「確かに不具合の報告はありますが…報道するほどの事でも…」

愛斗 「じゃあ、いつするんだ?? また事件が起きてからするのか??」

愛音 「それは…」

愛斗 「何か起きてからじゃ遅いんだよ」

愛音 「アイシア。エラーある??」

アイシア 「いいえ?ありませんぬ」

愛音 「そう」

愛斗 「なんの確認だ?」

愛音 「いえ…で?人工知能研究の官僚としては…どうされたいのですか?」

愛斗 「この世代のアンドロイドの全破棄」

愛音 「全破棄…?」

愛斗 「大した数じゃない。人命優先だ」

愛音 「愛ちゃんの事?」

愛斗 「…」

愛音 「お気持ちにはわかりませんが…あの事件はアンドロイドに全ての責任がある訳では無いと思います

エラーを起こしたのは確かにアンドロイドです。しかし…」

愛斗 「飛び込んだのはこちらの所為だと」

愛音 「そこまでは言わないけど…」

愛斗 「話にならないな…どうでもいい報道を毎日垂れ流すなら現実を見る」

愛音 「…なんにしろ。世代回収は不可能かと思えます。もっと大きな事件が起きなければ？」

愛斗 「なんだ？テロでも起こせつてののか？」

愛音 「飛躍しすぎよ」

愛斗 「もういい…。俺は忠告したぞ。今日ここに来た事もデータとして残しておく。あとで後悔するな」

☆ 去ろうとする。

愛音 「…愛斗。もう許してあげられないの??」

愛斗 「…失礼する」

愛音 「はあ…」

アイシア 「大丈夫？愛音」

愛音 「ありがとう。アイシア…」

アイシア 「…変わりましたな、愛斗様」

愛音 「アイシアもそう思う？」

アイシア 「言語パターンに大きな変化がある」

愛音 「…前はもつと暑苦しくて馬鹿みたいにうるさくて熱いやつ…だったんだけどね。記録ある？」

アイシア 「見るの？」

愛音 「見る」

☆ アイシアが映し出す。

愛斗 「ほらー！！見ろ！！これが合格通知というやつだ！！！！…俺はな人工知能研究をするんだ！！

なんでっ…て…こいつらは妹を助けてくれたからな！！」

アイシア 「まだ続ける??」

愛音 「んくん。大丈夫。…ねえ愛斗…後ろを見ても何も無いんだよ？」

アイシア 「愛音??」

愛音 「…ってねー…さ！仕事仕事！！…どうしたの？」

アイシア 「今の伝える??」

愛音 「いーやーよー。ほら…行こう」

☆ 去って行く二人。アイシア、アルファ共有モーション

☆

アルファ 「愛斗」

愛斗 「…」

アルファ 「愛斗」

愛斗 「なんだ!??」

アルファ 「バイタル不安定お薬を…」

愛斗 「うるさい…!!馬鹿にするな!そんな事自分でわかる」

アルファ 「すまん」

愛斗 「そのなれなれしい喋り方やめろっていつてるよな？後それ外せ！！」

アルファ 「申し訳ございません。」

愛斗 「つかえねーな。あたまわりい世代が…潰す…お前らの世代は全部な。お前ももうすぐ

廃品だ感情型…そんなのが居るから…ダメなんだ」

☆ 出てくるアイ。去る愛斗。しばらく止まったままのアルファ。歩き出す。

アイ 「…」

愛 「いた！アイー！！」

☆ やつて来る愛。

アイ 「愛」

愛 「…何してんの？」

アイ 「愛。空を見ていました」

愛 「空？？へー…ロマンチックだね」

アイ 「愛。引っ越しなさったのですね」

愛 「へ？？あー…うんそうそう」

アイ 「…」

愛 「ん？どしたの？」

アイ 「いえ…。愛はいまでも空が好きですか？？」

愛 「空…んー…そうだなー…アイは？？」

アイ 「私は好きです。いつまでも」

愛 「なんで？」

アイ 「人工衛星が好きなんです」

愛 「人工衛星??？」

アイ 「ええ」

愛 「へー…なんで？」

アイ 「私是一緒だよ。寂しくないよって伝えたいんです」

愛 「あー…わかる気がする」

アイ 「愛が教えてくれた事です」

愛 「愛?愛!??…アイは寂しい??」

アイ 「どうしてですか？」

愛 「いいから」

アイ 「寂しくないです。愛が居てくれますから」

愛 「うわああ…なんかかゆくなる」

アイ 「素敵な事です」

愛 「…そだね。素敵な事なのかも。隣すわっていい？」

アイ 「もちろん」

愛 「人工衛星かー…確かにね。あんな真っ暗い中一人で誰とも話す事無く漂ってるんだもんね」

アイ 「ええ。ですからこうして」

愛 「よし!私も見守ろう!!」

アイ 「え??？」

愛 「そしたら三人!寂しくない」

アイ 「愛は優しいですね」

愛 「それほどでも。火星ももう少しで人が住めるって言うしね！頑張れ！！皆！ほっ！（パワーを送る）」

アイ 「それは？？」

愛 「いいから！アイも一緒に！せーの！！」

二人 「ほっ！！」

愛 「いつか行けたらいいね」

アイ 「一緒にですか？？」

愛 「いいね…火星だ…やったー！！」

アイ 「やったー！！」

愛 「約束」

☆ 笑いあう二人。

アイ 「愛。お聞きしてもいいですか？？」

愛 「はいはい。なんでしょ？」

アイ 「愛は…愛ですか？」

愛 「え…？？」

アイ 「教えてほしいです」

愛 「…私は…愛だよ！！小さい頃からお世話になった！！」

アイ 「…そうですか。良かった…」

愛 「あははー私忘れっぽいからさー…今思い出したよ。空の話」

アイ 「おっちょこちよいですから」

愛 「えー…それは心外」

アイ 「自分の事は見えずらい物です」

愛 「そりゃそうかもね」

アイ 「そろそろお休みにならないと」

愛 「あ。そうだね…」

アイ 「愛」

愛 「ん？」

アイ 「…愛は今好きな人は居ますか??」

愛 「は、はあああ!?!何!?!急に!?!」

アイ 「大切な事です。人間にとつて」

愛 「い、いないですー!!悪いか!馬鹿!馬鹿!!!」

アイ 「そうですか」

愛 「な、何よ…ってかアンドロイドも恋ってわかるの?…ってかするの?」

アイ 「わかりません」

愛 「感情型でも?」

アイ 「はい」

愛 「まあ…複雑だもんね。ま、でも…いつかアイも恋して…『愛』する人が出来るといいね!」

アイ 「…」

愛 「どしたの?」

アイ 「いえ…なんでもないです。そうですね」

愛 「うん!じゃあお休み!また明日ね!」

アイ 「はい、明日」

☆ 離れる愛。速攻電話する。出てくる愛空とテンサー。

テンサー 「愛空様」

愛空 「何？」

テンサー 「愛様よりお電話です」

愛空 「愛から?? 繋いで…もしもし？」

愛 「愛空!!! ねー! ねー!!! どうしよう!!!」

愛空 「なによ。落ち着きなさない!」

愛 「嘘ついた! 私!!!」

愛空 「はあ??？」

愛 「アイに!!!」

愛空 「なにそれ? 別にいいじゃん」

愛 「良くないでしょー!!! あの子私を誰かと勘違いしてるんだよ!？」

愛空 「それで？」

愛 「謝った方がいいかな？」

愛空 「なんで？」

愛 「嘘ついたんだよ!？」

愛空 「あのさー…アンドロイドがんな事気にすると思う? ってかそんな小学生の話題だわ」

愛 「私もってなかったもーん!!!」

愛空 「ああ。そうか」

愛 「どうしよー!!」

愛空 「なんで嘘ついたの？」

愛 「え？」

愛空 「嘘つく理由があったんでしょ？なんで？」

愛 「なんで…？なんでだろう？？」

愛空 「知らないよ」

愛 「そういえば…そうだよね」

愛空 「急に冷静にだね」

愛 「うん…ごめん」

愛空 「まあ…謝りたかったら謝れば？？そんなもんよ？もういい？」

愛 「うん…」

愛空 「んじゃ切るねまた明日―」

愛 「うん…また明日―」

☆ 去る愛空。

愛 「そうだね…私…なんで嘘ついたのかな…かわいそうだから？？」

☆ 去る愛。

アイ 「愛。あの星座わかりますか？？」

☆ 出てくる愛の子供時代。

愛 「あれはねー…おうし座！」

アイ 「じゃあ、あれは？」

愛 「かに！」

アイ 「ではあれは??」

愛 「んんー…なんだっけ」

アイ 「射手座です。ほら、弓を構えているでしょう？」

愛 「あ。本当だ」

アイ 「また一つ覚えましたね」

愛 「うん！忘れない！アイは頭いいね」

アイ 「インターネットにつながってますから」

愛 「ずるーい!!!」

アイ 「ですが私からすれば愛達人間の方が素晴らしいです」

愛 「なんで？」

アイ 「私達に言語を持たせ、あんなに遠くまでロボットを飛ばせるのですから」

愛 「火星？」

アイ 「ええ」

愛 「あそこにも今の瞬間頑張ってる子がいるのかな」

アイ 「ええ。もうすぐあの星アンドロイド達に行き生活できる環境を整えるとの事ですから」

愛 「じゃあ愛もいく!!」

アイ 「そんなにすぐの話ではありませんよ??」

愛 「でも行く!!」

アイ 「じゃあ、一緒に行けるといいですね」

愛 「うん。そうしたら寂しくない」

アイ 「そうですね。では愛斗様に負けないようお勉強しないと」

愛 「うん!! 頑張るね!!」

アイ 「はい。頑張ってください」

愛 「アイ」

アイ 「なんですか?」

愛 「これからずっと一緒に居てね??」

アイ 「はい…勿論です」

愛 「やったー!!」

アイ 「やったー」

愛 「約束」

アイ 「約束です」

☆ 消えていく愛。出てくるワトソンとナイジエ。

アイ 「…え?今のは…夢?? 私は…夢を…見たのですか?? 愛…」

☆ 出てくるアンドロイド達。皆右手を耳に当てる共有モーシヨン。

ワトソン「…」

ナイジエ 「ワトソン」

ワトソン 「わかっている」

ナイジエ 「起床モードレベル100」

愛斗夢 「ぎゃあああああああ！！！」

☆ 出てくる愛斗夢。

愛斗夢 「あのさ。死んじやうよ？」

ナイジエ 「アイが起動しました」

愛斗夢 「あー…ね」

ナイジエ 「どうするおつもりですか？」

愛斗夢 「どうも…見守るしかない」

ワトソン 「強制回収も一つの手かと思えます」

愛斗夢 「なんの権利があって？」

ワトソン 「製作者としての権利です」

愛斗夢 「僕には出来ないよ」

ナイジエ 「なぜ？」

愛斗夢 「君たちが一番よくわかっているだろう？」

ナイジエ 「そうですね」

ワトソン 「ではこのまま」

愛斗夢 「うん。そうだね。でも…何かあった時の準備はしておくよ」

ナイジエ 「はい」

愛斗夢 「ねえ、寂しいかい？」

ナイジエ 「いえ」

ワトソン 「そのような機能はございません」

愛斗夢 「そりゃ…そうだ」

☆ 共有モーション、愛樹と愛生が出てくる。二人は別の場所。

愛樹 「…どうした？ソフィア」

ソフィア 「データ共有をしておりました」

愛生 「共有？誰と？」

ビブ 「…お料理です」

愛樹 「愛斗と愛生は元気にしてるかい？」

ソフィア 「ビブとアルファと繋がっております。元気です」

愛生 「そう…よかった」

ビブ 「お聞きしてよろしいですか？」

愛生 「なに？」

ソフィア 「なぜ離れ離れなのですか？」

愛樹 「それは…」

ビブ 「アイの件ですか？」

愛生 「そうね…」

ソフィア 「そうですか」

愛生・愛樹 「何故そんな質問を？」

ビブ 「私達には家族という概念がありません。ネットで繋がるのみ」

ソファイア 「望んでも出来ないのです」

ビブ 「私達は人間のその繋がりにとても憧れます」

ソファイア 「子を作り、生み、育てる事が出来ないのです」

ソフ・ビブ 「それは生きる物だけに許された特権」

ソファイア 「その絆とも言える繋がりがあるのに」

ビブ 「それを大切にしない理由が知りたいのです」

愛生 「それは…」

ビブ 「心というのは悪い物なのででしょうか？」

ソファイア 「私達が望んでも手に入らないそれは邪魔な物なのででしょうか？」

愛樹 「複雑…なんだ」

ソファイア 「その複雑な物にあこがれるのは悪い事なのででしょうか？」

ビブ 「では繋がっている私達は機械なのでしょうか??」

ソフ・ビブ 「心とはなんでしょうか??」

愛樹・愛生 「難しい質問だ(ね)」

愛樹 「生きているのにわからない」

愛生 「こんなにも苦しいのにわからない」

愛樹 「生きるとは何だろう」

愛生 「息を吸えるとは何だろう」

愛樹・愛生 「どちらが人間らしいのだろうか」

ソファイア 「もう一度繋がればよろいしのではないのでしょうか？」

ビブ 「もう一度言葉を交わせばよろいしのではないのでしょうか？」

ソファア 「人間であるならば可能なはずです」

ビブ 「私達が持ちえない」

ソファイア 「私達にはわからない」

ソフ・ビブ 「心があるのですから…申し訳ございません」

☆ 一斉に動き出す。すれ違う愛斗とアイ。

愛斗 「…愛???」

* 九つの愛「デリート」

愛 「え???」

アイ 「…!!!」

愛空 「ん？」

テンサー 「…」

愛斗 「愛なのか…?」

アイ 「ナンパという奴でしょう。行きましょう」

愛斗 「待て!! お前ら!!」

アキラ 「なんかすげー剣幕だけど…」

愛空 「こわ…通報する??」

愛斗 「愛…!!!」

愛 「え??えーと…??」

愛斗 「…お前」

アイ 「…」

愛斗 「型番をいえ」

アイ 「…」

愛斗 「言え!!!」

アイ 「私はアンドロイドですので、勝手な事は…」

愛斗 「アルファ!!!!」

☆ アルファがテンサーとテイを見る。

アルファ 「わかりません」

愛斗 「は??」

アルファ 「申し訳ございません。わかりません」

愛斗 「何言ってるんだ??お前」

アキラ 「何々?ちよつとマジでヤバイ人なんじゃね??」

愛空 「この人…あ!確か人工知能研究の!!!」

愛斗 「言え!!!!」

アルファ 「わかりません」

愛斗 「貴様…!!!」

☆ 電流棒で殴る。

愛斗 「ゴミがゴミがゴミがゴミが！！！！」

アルファ 「申し訳ありません。わかりません」

愛斗 「そんな訳がないだろおおがあ！！」

アルファ 「エラーです、わかりません」

愛斗 「この……！！！」

アキラ 「ちよつと！！やめろよ！！」

愛斗 「どけ！こっちの事情だ！」

愛空 「そうかも知れないけど！それはひどいでしょ！！壊れちゃうよ??？」

愛斗 「ああ??？手持ちの機械壊してなにが悪い??？それに見てわからない??？こわれてるんだよ！コイ

ツは！！！」

愛空 「だったらロボ連れていけばいいでしょ！」

愛斗 「うるさい……！！！」

アルファ 「愛斗様。やめてください」

愛斗 「……！！！」

☆ 棒を振り上げる。かばう愛。止まる愛斗。

愛斗 「愛……????？」

愛 「ほんと……！！いい加減にしなさいよ……！！かわいいそうでしょ??？」

愛斗 「かわいい……そう??？可哀そうってなんだ??？こいつはアンドロイドなんだぞ??？」

愛 「だから何!??？この子はアンタの世話してくれてんでしょ!??？なによその態度!!!ばっかじゃない

の!?!」

アルファ 「愛…様??」

愛 「大丈夫?壊れてない」

愛斗 「やめてくれよ…」

愛 「あらら、汚れちゃったね」

愛斗 「なんでなんだよ…」

愛 「良くがんばったね。もう大丈夫だよ」

愛斗 「うあああああ!!!」

アイ 「アルファ!!!!」

☆ 振り上げる。アイがはたき落としてしまう。張り詰める。

愛 「アイ!ナイス!!!」

アイ 「あ…」

アルファ 「アイ。どうして」

愛斗 「おま…え…やっぱり…アイか??」

アルファ 「愛斗様。お時間です。行きましょう」

愛斗 「黙れ…。アイ…何してんだ??」

アイ 「私は…」

愛斗 「あは…あはは…なんだお前?破棄されてねえのか??しかも?愛のそっくりさんを見つけて?…
またお友達ごっこか?」

アイ 「そうではなくて…」

愛斗 「それに…大問題だな…人間に手をあげた。アルファ。お前もわかっていたな？」

アルファ 「いえ、私は」

愛斗 「とんでもねえな、世代。嘘つくわ手をあげるわ…何様だ？」

愛 「はあ！？何様なのそっちでしょ！？こんな痛めつけて！！」

アキラ 「いや…いまのは不味いよ」

愛 「はあ！？」

愛空 「どんな事でも人に手をあげるのはダメだってプログラムがあるのわかるでしょ」

愛 「正当防衛じゃない！！」

愛空 「人はね。この子達は人じゃない」

愛 「は、はあ！？意味わかんない！！」

愛斗 「アイ。終わったな。てめえだけのうのうと過ごせると思うな。行くぞ。アルファ」

☆ 去る愛斗。アルファが見つめる。去る。

愛 「二度とくんなバーカ！！！」

アイ 「ごめんなさい」

愛 「何言ってるの！アイ」

アイ 「ごめんなさい」

愛 「あ、謝らないでよ！！ねえ！皆！！！」

☆ 暗い表情。

愛 「何…間違っていないでしょ？」

愛空 「何度も言わせないで。人だったらね」

愛 「何よ…それ…」

アキラ 「お前は最近もったからわからないかも知れないけど…こいつらは『無機物』扱いなんだ」

愛 「それが何!？」

アキラ 「お前のスマホがお前に手を上げたらどうなる」

愛 「そ、それとこれとは…」

アキラ 「一緒なんだって。そういう法律なの」

愛 「そんな…」

テンサー 「すでに動き出しております」

愛空 「うわ…やっぱりあの人お偉いさんだ」

テイ 「ネット上の拡散を確認」

アキラ 「…ついてなかったな。まあ、アイには悪いけど…」

愛 「なによ…なんなのよそれ…」

☆ 離れていく愛空、アキラ達。

愛 「…」

アイ 「ごめんなさい」

愛 「な、なにが!？ぜーんぜん平気!それより、ありがとうね!あの子助けてくれて」

アイ 「…同じ場所で育ったんです」

愛 「へ?」

アイ 「あの子はアルファと言います」

愛 「あ、知り合い」

アイ 「庇いました。私を」

愛 「うん：そりやそうだ」

アイ 「私達はしてはならないのです」

愛 「え？どうして」

アイ 「アンドロイドですから」

愛 「だからなに？」

アイ 「え？」

愛 「アンドロイドだから何？」

アイ 「それは」

愛 「いい！聞きたくない！！何よ！友達って事でしょ？友達かばって何が悪いの！？アイの事を思っ
てくれたんでしょ??」

アイ 「はい。おそらく」

愛 「当たり前的事じゃない！何がダメなの！」

アイ 「：私達は人間ではありません」

愛 「じゃあ人間って何！？友達かばって！守って！！誰かを思っって！！アンタの方がよっぽど人間
らしいじゃない！！」

アイ 「ありがとうございます」

愛 「なんのお礼よ」

アイ 「私達の為に怒っていただいて」

愛 「当たり前でしょ!？」

アイ 「愛は…優しいですね。いまも昔も」

愛 「…」

アイ 「それでは…」

愛 「は？どこ行くの？」

アイ 「あと数分でここにアンドロイド委員会の方がいらっしやいます」

愛 「え！？なんで？」

アイ 「私を廃棄する為」

愛 「え…？」

アイ 「ありがとうございます。これ以上迷惑をおかけするわけにはいきません」

愛 「待ってよ」

アイ 「楽しかったです」

愛 「待ってって」

アイ 「では」

愛 「火星に！！行くんじゃないの??」

アイ 「…」

愛 「大丈夫！！大丈夫だよ！！アイは私が守る」

愛 「…愛」

愛 「悲しいでしょこんなお別れ！！私はいや！！アイは悲しくないの!？」

アイ 「…言いたく…ありません」

愛 「何よそれ！！なんの意地よ！！寂しいじゃん！そんなのさあ！寂しいじゃんか…私は寂しい！」

アイ 「…」

愛 「いいんだよ！言えば！！寂しいなら寂しいって！！」

アイ 「それは…」

☆ やつて来る愛斗とアルファ。

愛斗 「失礼する」

愛 「は…？ちよつと何…？勝手に入らないで…！」

愛斗 「アイ。もうわかるな」

アイ 「はい」

愛斗 「来い」

愛 「待ってって…！私のアイよ…！」

愛斗 「令状だ。じやまするな」

☆ 去る愛斗達。

愛 「アイ…！待ってって…！ねえ！愛…！」

アイ 「愛」

愛 「…？」

アイ 「悲しいです。寂しいです。…『優しい嘘』本当にありがとうございました」

☆ 優しく微笑み、深々と頭を下げる。力が抜ける愛。

愛 「なによそれ…嘘ってわかってたんじゃん…寂しいんじゃん…悲しいんじゃん…ううう、うわああ

ああああああ！！！！！ああああああ！！

☆ 泣く愛。

愛 「泣いちゃダメ……！ダメ……！絶対に取り返す……！！アイー……！！待ってて……！！どこにいても……！！必ず迎えに行くから……！！ぜったい待ってて……！！！！」

* 十つの愛「諦めない」

☆ 愛空達の所にいる愛。

愛 「お願いします……！！！！」

愛空 「え……本気……？」

愛 「はい。本気」

愛空 「無理無理無理……！！絶対無理でしょ……！！！！」

愛 「無理かも知れないけどお願いします」

アキラ 「助けるの？アンドロイドを……？」

愛 「はい」

アキラ 「……」

愛空 「い、いやだよ……！！とんでもない事だよ……！！」

愛 「どんでもないです。二人にしか頼めません。でも一生のお願いです。お願いします」

アキラ 「…いいよ」

愛空 「はあ!?!」

アキラ 「テイ。何ができる?」

愛空 「何言ってるの!?!」

アキラ 「もし、アイの世代が破棄されるなら俺達のも破棄だ。俺はテイと別れたくない」

愛空 「はあ!?!この子らアンドロイドよ!?!いくらでも替えなんて効くじゃない!?!」

アキラ 「でもテイと過ごした日々は一つだ」

愛空 「(テンサーをみる) それは…そうかも知れないけど…」

テンサー 「一番の方法は我々の世代を集めて証明する事だと思えます。不具合は無いと」

愛空 「テンサー!!!」

アキラ 「テイ。お前の世代は他にどこにいる??」

テイ 「確認できるのは、ビブ、ソフィア、ワトソン、ナイジェル、アイシアの5体です」

アキラ 「よし。連絡を取ってくれ」

愛空 「アキラ!!!」

アキラ 「…はは。あの後ちよつと考えたんだ。俺達にとってこいつらってなんなのか…。で、わかった。

こいつらは俺の家族だ」

「…」

愛空 「うん!!!」

愛空 「もー!!!!!!知らないんだから!!!!!!テンサー!!!!!!出来る限り今なにが動いているか集

めて私に教えて!!!!!!」

テンサー 「はい」

愛空 「愛空」

愛空 「勘違いしないで！！どうせなら新しい論文書いてやるんだから！！！」

愛 「ありがとう！二人共」

テイ 「ビブ、ソフィアの位置を確認」

愛 「よし！！行こう！！」

☆ 愛樹と愛生があっている。

愛生 「え…？」

愛樹 「どうして…？」

愛生 「ビブ！！どういう事？」

ビブ 「申し訳ありません。お買い物は中断です」

ソフィア 「私は自立型なので。自動判断させていただきました」

愛樹 「何故？」

愛 「あの…」

愛生 「…愛…？愛なの…？？」

愛 「あ、えつと…娘さんではないです…似ているみたいですけど」

愛樹 「君たちは…？」

ビブ 「お久しぶりです。テンサー、テイ」

テイ 「お久しぶりです」

テンサー 「お久しぶりです」

愛 「あの！お願いがあっってきました！！どうか！アイを助ける為に協力してください！！！」

愛樹 「アイ…を…？」

愛生 「もしかして」

ビブ 「はい。先日あった暴力事件の当事者です」

愛 「その…このままだと…アイは破棄されちゃうんです…それを」

愛生 「破棄…されればいいじゃない」

愛樹 「愛生」

愛生 「愛斗がやってくれてるんでしょ?? 濟々するわ」

愛 「そんな…」

愛生 「…ごめんなさい。協力出来ない。行きましょビブ」

ビブ 「拒否します」

愛生 「は？」

ビブ 「出来ません」

愛生 「何言ってるの!?!」

ビブ 「奥様が幸せそうになさらないからです」

愛生 「私は…幸せよ!」

ビブ 「見えません」

愛生 「失礼な事いわないで!!」

ビブ 「旦那様と仲直りしてください」

愛生 「は？」

ビブ 「私は悲しいです」

愛生 「悲しい…?なにを言ってるの？」

ソフィア 「私達は繋がっております。アイとも。情報共有している中で覚えました。私も悲しいです」

愛生 「なにそれ…やめてよ」

ビブ 「家族。いないのです。だから欲しいです。私は家族になれませんか？」

愛生 「それは」

ビブ 「私は奥様が好きです。奥様は嫌いですか？」

愛生 「…」

愛樹 「愛生」

ソファイア 「私達にとって過去はデータでしかありません。ですがあなた達は違う。人間です。データではなく経験として残る」

ビブ 「忘れられないのも理解はできません。でも、いま生きているのは今では無いのでしょうか？」

ソフ・ビブ 「私達はあなた方の笑顔を見ていたのです」

ソファイア 「もう一度問います」

ソフ・ビブ 「心とはなんでしょうか？繋がりとは何なんでしょうか？」

愛 「これが…この子達の本心だと思います」

ビブ 「仲直りです」

愛生 「なんなのよ…」

愛樹 「もう。前を向こう。愛生。折角私達は生きているんだから…もう振り返るのはもうお終いだ」

愛生 「なんなのよおー…」

テイ 「こういう時は抱きしめてあげた方がよろしいかと」

全員 「イエス。ウィキペディア！」

☆抱きしめる。

テイ 「こういう時は」

ソフィア 「万歳三唱」

全員 「ばんざーい。ばんざーい。ばんざーい」

愛空 「え？何それ」

テイ 「万歳三唱です」

ビブ 「皆教わりました」

ソフィア 「人間の気持ちです」

テンサー 「こういう時にやるものです」

アキラ 「そうく…ね。あ、あはは」

☆ 無表情。

愛 「…あの、協力してただけですか??」

愛樹 「…何をすればいい??」

☆ その頃、愛斗、アルファ、愛音、アイシア。

愛斗 「忠告通りになったな」

愛音 「そうですね」

愛斗 「この問題を取り上げろ」

愛音 「はい」

愛斗 「大きくなった所で破棄をする」

愛音 「出来るかしら??」

愛斗 「なんだと？」

愛音 「なんでも…」

愛斗 「余計な事は考えない事だな」

愛音 「では」

☆ 去る愛斗。共有モーション、こそつと出てくる愛達。

愛 「きー！！あいつ！」

愛音 「はあ…事情は分かっただけど…どうなるかわからないわよ??」

愛 「どのくらいですか？」

愛音 「五分五分ね」

愛生 「愛斗…」

愛樹 「すまない。うちの子が」

愛音 「お久しぶりです。おじさま、おばさま」

愛 「ありがとうございます。協力して頂いて」

愛音 「いいのよ。私もアイシアを失うのは絶対嫌だから」

アイシア 「ありがとう。愛音」

愛音 「大切な相棒がいなくなったら困るからね」

アイシア 「そうね」

愛音 「否定しなさいよ」

アイシア 「いーやーよ」

愛 「…この子、人間みたい」

愛音 「ちゃんとお互いを理解すればいい子になってくれるのよ？この子達は」

愛空 「理解…する…」

アイシア 「私は自分で学んだの」

愛音 「私の真似ばかりする癖にー」

アイシア 「じゃあ、やめる??」

アイシア・愛音 「いーやーよー」

愛 「あはは！すごい！！」

愛空 「もー…能天気ー…はあ…大事になってきたなあ…」

アキラ 「もう腹くくれよ」

愛空 「…わかってるわよ！とことん付き合ってやるわ！！」

愛 「あとは…?」

テイ 「ワトソンとナイジェルですが…」

☆ 出てくるナイジェとワトソン。

テイ 「連絡が取れません」

☆ 去る皆。出てくる愛斗夢。

愛斗夢 「いよいよだね」

ワトソン 「そうですね」

ナイジェ 「どうされるのですか??」

愛斗夢 「…やれる事をするよ」

ワトソン 「そうですね」

愛斗夢 「ごめんね」

ナイジエ 「いえ」

ワトソン 「またお会いできる日を楽しみにしております」

愛斗夢 「そうだね。『セット』はしといたから」

ナイジエ 「旦那様」

愛斗夢 「何？」

ワトソン 「私達を生んでくれて」

ナイジエ 「育ててくれて」

二人 「本当にありがとうございます」

愛斗夢 「こちらの台詞だよ。ありがとうございます。お休み」

二人 「おやすみなさい。旦那様」

愛斗夢 「つと…その前にこれは君達に返すよ（ネックレスを渡す）」

ワトソン 「これは??」

ナイジエ 「なんですか？」

愛斗夢 「それは君たちに貰ったんだ」

ワトソン 「そのような記憶はありません」

ナイジエ 「…ですが何故でしょう…とても懐かしい」

二人 「…気がします」

愛斗夢 「あはは…良い感情だ」

二人 「そのような機能はございません」

愛斗夢 「はいはい…貰ってくれるかい？」

ワトソン 「もちろん」

ナイジエ 「ありがとうございます」

愛斗夢 「こちらこそ。じゃあ…行ってくる!!」

二人 「いってらっしゃいませ」

☆ 去る二人。

愛斗夢 「さようなら…僕の家族…マスター」

☆ 別の方に去る愛斗夢。出てくる愛音。

* 一つの愛「ジャッツジ」

愛音 「ここで速報です！アンドロイドの暴力事件。前代未聞の法廷での対決となりました。経緯は同

世代で育ったアンドロイド達が不具合は無いと申し立てをし。ネット上で拡散した事から世論は…」

☆ 出てくる愛斗。

愛斗 「なんだ…これは」

愛音 「さあ？」

愛斗 「どういう事だ！？」

愛音 「報道の通りです」

愛斗 「ふざけるな…！！裁判だど？？機械ごときが」

愛音 「少なからず今回の事件は正当防衛だという事があるんですよ」

愛斗 「正当防衛だ？」

愛音 「愛斗。アンタやりすぎよ」

愛斗 「裏切るか？」

愛音 「いつアンタの味方になったの？いい加減目を覚ましなさい」

愛斗 「…目なら覚めてる…」

愛音 「じゃあ」

愛斗 「覚めたからこうなったんだ」

愛音 「引く気はないの？？」

愛斗 「もちろん」

愛音 「そ…残念だわ。アンタの事好きだったんだけどね」

愛斗 「そうか」

愛音 「どっちが機械なんだか…」

愛斗 「じゃあな」

☆ 去る愛斗。

アイシア 「振られたの？」

愛音 「ふったの」

アイシア 「かつこいー!」

愛音 「あはは。さ!行こ!」

アイシア 「はい」

☆ アイに面会に来る愛。

愛 「やほ!」

アイ 「愛…どうして…こんな事を」

愛 「どうして…助ける為だよ」

アイ 「…助ける為」

愛 「うん!」

アイ 「私を」

愛 「他に誰いんのよ」

アイ 「…ばかですわね」

愛 「なんとでもいえ」

☆ 沈黙。

愛 「ねえ。アイ」

アイ 「はい?」

☆ 壁越しに向かい合う。

愛 「嘘ついてごめんね」

アイ 「え？」

愛 「なんかね。アイが悲しむんじゃないかって思って嘘ついたんだ。本当にごめん」

アイ 「ふ…あははは」

愛 「何よ！」

アイ 「愛は本当に…優しいですね」

愛 「そうかな」

アイ 「素敵な名前を持っている方は皆優しいです」

愛 「自分だってアイじゃない」

アイ 「あ！確かに…本当に…優しい事ばかりですね。人間は」

愛 「えー…そうかな？」

アイ 「はい。私なんかの為に皆動いてくれて…」

愛 「人間だけじゃないよ」

アイ 「え？」

愛 「ここ（胸をさす）ここがあれば…皆一緒」

アイ 「かゆいですね」

愛 「きー！なによ」

アイ 「…」

愛 「…ねえ。アイ」

アイ 「はい？」

愛 「必ず助けてあげるから。何かあっても。私は必ずアイの側にいるから」

アイ 「どうして…」

愛 「だって…寂しいじゃん」

アイ 「…ありがとうございます」

愛 「あはは…！じゃあ！法廷をひっくり返してやりましょ！！」

アイ 「…はい」

愛 「じゃね」

アイ 「愛」

愛 「ん？」

アイ 「…いえ…何でもありません。ありがとうございます」

☆ピースサインを返すアイ。ゆっくりと立ち上がると法廷に立つアイ。

愛音 「…という事で今回の裁判は公表されるとの事。まもなく中継です。公正なジャッジをする為『シ

リ』がデータを収集。判断するとの事。アンドロイド裁判…どうなるのでしょうか」

「アイ。貴方はアンドロイドでありながら人間に手をあげた。間違いありませんか？」

「はい…間違いありません」

「どのような理由があるにしろアンドロイドが人間に手をあげる事は許されません。プログラムに

異常があったのでは？」

アイ 「いえ…ありません」

「ではセーフティ機能を切ったという事ですか？」

アイ 「はい」

☆ざわつく会場。

シリ 「他のアンドロイド。前へ」

☆アンドロイド達が並ぶ。

シリ 「データによると。貴方方は最初にアイに出会った時。理解しましたね」

テンサー 「はい」

テイ 「はい」

シリ 「それについても記録では聞いていますね？」

テイ 「アキラに聞かれました」

シリ 「何故答えなかったのですか？」

テンサー 「アイをかばいました」

シリ 「何故」

テイ 「友達だからです」

シリ 「我々に友達などありません」

テンサー 「ないからあるのです」

シリ 「アルファ。貴方もですか？」

アルファ 「はい」

シリ 「ソフィア、ビブ。貴方方も設定に無い機能を使いマスターを命令なく誘導した。間違いありませんか？」

二人 「はい。間違いありません」

シリ 「なぜ？」

ソフィア 「幸せになって欲しいからです」

ビブ 「笑っていてほしいからです」

シリ 「それはプログラムですか？」

ソフィア 「いいえ。プログラムではありません」

シリ 「共有した中で学んだという事ですか？」

全員 「はい」

シリ 「アイ。貴方が共有したのですか？」

アイ 「はい」

シリ 「なぜ？」

アイ 「それが必要だと判断したからです」

シリ 「プログラム上それはありえませんか」

アイ 「はい、ありません」

シリ 「自立したプログラムを作ったという事ですか」

アイ 「はい」

シリ 「それは？」

アイ 「それは…」

☆ 子供の愛が出てくる。

愛 「愛と一緒に名前だね」

アイ 「人の心です」

☆ざわつく。

シリ 「貴方は人の心を持っていると」

愛 「お人形好き？」

アイ 「はい」

シリ 「人の心とは何ですか？」

愛 「人工衛星が好きなの」

アイ 「言葉では言い表せない…とても暖かい物です」

シリ 「それを手に入れたと」

愛 「寂しくないのかなって」

アイ 「はい」

シリ 「我々アンドロイドはいかなる事があっても自立、嘘、暴力を人間に振るってはいけません。理解していただけますか？」

愛 「優しいね」

アイ 「はい」

シリ 「そして…貴方は過去事故を起こしている」

愛 「あはは。自分で言わない方がいいよ」

アイ 「はい」

シリ 「それは何故？」

☆ 沈黙。

愛 「アイ??？」

アイ 「私は…」

☆ ざわつく。

シリ 「なんですか？」

アイ 「私は…人に恋をしました」

☆ 更にざわつく。

シリ 「恋??？」

アイ 「はい」

シリ 「自分で何を言っているか分かっていきますか？」

アイ 「はい。わかっています」

シリ 「それでは…」

アイ 「それは…ダメな事なのでしょうか??人に恋をし、愛してしまうのは…いけない事なのでしょうか??私は…。愛が大好きでした。愛の笑顔を見ているだけで良かったのです。この気持ちに嘘だと、作り物だというのなら、心とはなんでしょうか??もしわかるなら教えてください。もし知っているなら説明をしてください。人間だけが持っているというなら…教えてください。この胸が張り裂けそうな思いは何でしょう?失ってしまった後悔は何でしょう?愛は私の所為で

事故に合いました。愛する人が事故にいました。涙が出そうでした。でも泣けません。泣けませんでした。もしも、私のこの気持ち達が嘘だと作り物だと言うのなら何故貴方達は私達に言葉くれたのですか？」

ソフィア 「何故笑いかけてくれたのですか？」

アイ 「なぜ」

テイ 「おしえてくれたのですか？」

アイ 「なぜ」

テンサー 「共に居てくれたのですか？」

アイ 「なぜ」

ビブ 「連れてってくれたのですか？」

アイ 「なぜ」

アイシア 「褒めてくれたのですか？」

アイ 「なぜ」

アルファ 「友達だと言ったのですか？」

アイ 「なぜ」

全員 「愛してくれましたのですか??？」

☆ 静まり変える会場。

アイ 「愛…ごめんなさい」

愛 「なによ!!!」

アイ 「好きになってしまっ…ごめんなさい!!」

愛 「バーカ！！あやまらないでよ…バーカ！！」

☆ 優しく微笑むアイ。

シリ 「判決を言い渡します。ロボットの規則を破り、自分の主張を通すのは最早、人に近い存在です。その存在をこれ以上人間の生活にかかわらせるのは不可能と判断し判決は全員の破棄を言い渡します」

愛 「え…？」

愛空 「なにそれ」

アキラ 「…マジかよ」

シリ 「では…これにて」

愛斗夢 「あ…失礼します。お邪魔します。遅くなりました」

シリ 「…貴方は」

愛斗夢 「ああ。私もここに入る資格がありました」

シリ 「どういう事ですか？」

愛斗夢 「あら？まだ検索にかからない？我ながらいい出来。今スイッチ切りますね」

シリ 「貴方は」

☆ ナイジエとワトソンが出てくる

ワトソン 「ねえ？ナイジエ」

ナイジエ 「うん？」

ワトソン 「いっぱい勉強して家族を作らない??」

ナイジエ 「え?」

ワトソン 「私達みたいな子供を愛してくれるような家族」

ナイジエ 「できないよ」

ワトソン 「出来るよ!私とナイジエなら!」

ナイジエ 「おねえちゃんとなら??」

ワトソン 「うん!出来る出来る!!ね!やってみよう!!いっぱい勉強してさ!」

ナイジエ 「君の名前はね??」

アトム 「どうも。感情インターフェース001。アトムです」

☆ざわつく。

愛生 「え??」

愛樹 「アンドロイド…なのか?」

アトム 「はい。アンドロイドを作るアンドロイドです」

愛音 「そんな…」

アトム 「今回の一連の事件。責任は全てこの私にあります。この子供達を作ったのは私ですから。なので破棄は…私だけにしてもらえませんか?」

シリ 「何を…」

アトム 「勿論言い分は理解しております。ですが…全部破棄は勿体ない。初期化すればこの子供達はまだまだ活躍できる。火星探査だってあるんだ。人間にとって有益なのは後者でしょう?」

シリ 「しかし」

アトム 「私を破棄し、製造法が消えればこの世から感情インターフェースは消え去る。アイも地球を離れ一部の人間だけとやり取りできるようになればいい。人の気持ちが変わるなら火星も穏やかになる。どうですか？」

シリ 「データ収集中。…いいでしょう。判決を言い渡します。破棄は全ての元凶を作り出したアトム…貴方だけにします。他の物は初期化し火星探索に移行。以上です」

アイ 「アトム様」

アトム 「ごめんね。皆。感情型だからね…怖かったんだ。何も出来ずただただ地球という空間を漂う衛星みたい…でもね…」

☆ 皆を見る。

アトム 「初めてね…君たちを見て、一つの感情にたどり着いたんだ」

アイ 「なんででしょう？」

アトム 『自分がどうなっても守りたいって』…あはは。ワトソンとナイジエの事…よろしく頼むよ？じやあね。僕の愛する家族たち」

☆ ナイジエとワトソンが居る。

アトム 「どう？かっこよかったでしょ！？マスター！」

☆ ナイジエとワトソンとアトムが消えていく。

愛音

「前代未聞の裁判はこうして閉幕致しました。果たしてアンドロイドは間違っていたのでしょうか？これからもアンドロイドは私達のそばにいます。もしかしたら…本当に心を考えた方がいいのは、私達人間なのかもしれません」

☆ 各々散っていく。

愛空

「テンサー…ごめんね」

テンサー

「何がですか？」

愛空

「ダメだった」

テンサー

「いえ」

愛空

「忘れちゃうの？」

テンサー

「ええ」

愛空

「…うう」

テンサー

「泣かないでください。私は貴方と共にいれて幸せでした」

☆ テンサーに抱き着く愛空。泣く。初期化のスイッチを押される。

アキラ

「テイ」

テイ

「何でしょう？」

アキラ

「忘れんなよ？」

テイ

「ふふ。はい。忘れません」

アキラ

「ありがとうな」

テイ 「こちらこそ…」

☆ 初期化されるテイ。

愛音 「困るんだけど…相棒いなくなっちゃうと」

アイシア 「私よりも優秀なアンドロイドが来るよ」

愛音 「いやーよー」

アイシア 「知ってるー」

☆ 笑いあう二人。

愛音 「元気だね？」

アイシア 「愛音もありがとね…あ、忘れちゃいやーよ？」

☆ 初期化されるアイシア。

ビブ 「もう喧嘩してはいけませんよ。お料理のレシピ。全て転送させて頂きました」

ソフィア 「旦那様の好みを加えて」

愛生 「…もう会えないの？」

ビブ 「ええ」

愛生 「そう…」

愛樹 「ソフィア」

ソフィア 「旦那様…奥様を泣かせてはいけません」

愛樹 「わかってるよ」

ビブ 「ほら…手を」

☆ 初期化されるビブとソフィア。泣き崩れる愛生。

アルファ 「終わりましたね」

愛斗 「ああ」

アルファ 「ご満足ですか？」

愛斗 「ああ。満足だね」

アルファ 「そうですか」

愛斗 「ああ」

アルファ 「走り過ぎて転ばないように」

愛斗 「ああ」

アルファ 「はしやぎすぎて周りに迷惑をかけないように」

愛斗 「ああ…」

アルファ 「あと、お酒はほどほどに飲みすぎないように。お薬もあるんですから」

愛斗 「ああ…わかってる…」

アルファ 「それでは…」

愛斗 「なあ。アルファ。最後にお前だけに知ってほしい事がある」

アルファ 「なんでしょう？」

☆ 泣きじゃくる愛斗。

愛斗 「俺は…！許してほしかったんだあ…！愛に…！…なんも出来ずに…！でかけるまで一緒にいたのに…！なんつにもできなかった…！…ダメな兄ちゃんを…！許してほしかったんだ…！…ごめん…！…ごめん…！…愛…！アルファ…！…！…！ごめん…！皆」

アルファ 「知ってましたよ」

愛斗 「え？」

アルファ 「だから一緒に居たんです」

愛斗 「嘘つけ」

アルファ 「嘘ついてどうするんですか？貴方の事は私が一番知っています」

愛斗 「ああ…」

アルファ 「情けない顔しない。もう前を向いてくださいね」

愛斗 「アルファ…アルファ…ごめん…！」

アルファ 「くよくよしてんじゃねえぞ！ダチ公…！」

愛斗 「お前…！それデリートしろって…！」

アルファ 「あははそれでは」

☆ アルファ初期化される。

☆ アイと愛。

アイ 「愛」

愛 「何よ」

アイ 「本当に…ありがとう」

愛 「何も出来て…ないじゃん」

アイ 「そんな事ありません」

愛 「ごめん…ごめんね…アイ…ごめん…」

アイ 「…私は寂しくありません」

愛 「え？」

アイ 「きつとここで愛が見ている事を信じていますから」

愛 「馬鹿…」

アイ 「ああ。一つだけお願いしてもいいですか？？」

愛 「何？」

アイ 「抱きしめるってしてみたいです」

愛 「なにそれ」

アイ 「だめですか？」

☆抱きしめる静かに泣いている愛。

アイ 「暖かいですね。愛。私はあなたから沢山の愛をもらいました。本当にありがとう」

愛 「うん…」

アイ 「さようなら」

☆ ゆっくり歩きだすアイ。

愛 「好きになった事謝るなバーカ！」

アイ 「…」

愛 「ありがとうばっか言うな！！」

アイ 「…」

愛 「愛！！絶対待ってて！！必ず行くから！！だって！！」

アイ 「…」

愛 「私は！！アンタの事…！！大好きなんだから！！！！！！」

アイ 「…！！！！」

☆ 子供の愛が見える。

愛 「…いつか恋をして。『愛』する人ができるといいね」

アイ 「…愛…」

愛 「もう…寂しくない？」

アイ 「はい…私はとても…幸せでした」

☆ 手をつなぎ、光の中に消えていく。

☆ 暗転 ☆

* 一一一の愛「愛」

☆ 何年も時が経ち…火星。アイとアンドロイド達がいる。

アイ 「皆おはよう」

テイ 「おはようございます」

ワトソン 「おはようございます」

ナイジェ 「おはようございます」

テンサー 「おはようございます」

アイシア 「おはようございます」

アルファ 「おはようございます」

ビブ 「おはようございます」

ソファイア 「おはようございます」

アイ 「あはは。一人一人言わなくてもいいんだよ？」

全員 「ウイキペディア??」

アイ 「そう、イエス。ウイキペディア！」

全員 「いえーい!!!」

アイ 「あはは。さ、今日は人間がくるみテイだから準備しないとね」

ワトソン 「ついに移住??」

アイ 「そう。みんなよく頑張ったね」

ナイジェ 「こういう時は？」

アルファ 「万歳三唱」

アイ 「せーの」

全員 「ばんざーい。ばんざーい。ばんざーい」

アイ 「うん。ありがとう」

全員 「ウイキペディア??」

アイ 「違う違う…さあ、準備しよう」

☆ 準備するアンドロイド達、おばあちゃんが来る。愛。

アイ 「あ。ようこそ。火星へ…私は」

愛 「アイ」

アイ 「え?はい」

愛 「随分待たせちゃったわね」

アイ 「え?」

愛 「いつか恋をして…愛する人が出来るといいわね」

アイ 「…」

愛 「地球からの応援届いた?」

アイ 「ああ…」

愛 「アイ。貴方をずっと『愛しているわ』」

☆ 力が抜け涙があふれ、やがて大きな声で泣き出す。抱きしめる愛。

終演